

# 荒魂之會來歴

昭和六十一年四月  
荒魂之會

(活動略記)・夫々の年度に於ける新規活動事項

昭和五十年

十月 例會活動開始(船橋市御嶽神社にて毎週第二

土曜の夜)

昭和五十一年

三月 會報第五號・百部刊行(本號より一般配布、

年三回刊、順次部數を増加)

八月

あらたま創刊號・四十頁・參百部(以後年二

回刊、順次部數を増加、第二十一號は千部)

十二月 第一回連歌の會(第十回)

昭和五十二年

三月 會報第八號刊(本號より二百部)

十月 同胞各位に訴へる(その九)

昭和五十三年

三月 會報第十一號刊(本號より二百五十部)

十二月 講演會(六回)

少年讀本第一輯愛誦和歌發句撰の編修。

昭和五十四年

一月 第三回連歌の會(本年度より正月に開催)

二月 會報第十四號刊(三百部、本號より年四回)

三月 贊助會員、百名に達す。

四月 少年讀本第一輯愛誦和歌發句撰、千部刊行。

(第四刷、累計五千部)

五月 二十七日、愛誦和歌發句撰出版記念會(パレ

スホテル)

六月 愛誦和歌發句撰第二刷、千五百部刊行。

八月 第一回あらたま懇談會(第十六回)

昭和五十五年

二月 會報第十八號刊(本號より三百五十部)

四月 荒魂之會名簿刊(以後、隔年四月に刊行)

○同人十五、贊助會員百二十四

愛誦和歌發句撰第三刷、千部刊行。

十二月 あらたま第十號刊(五十八頁、六百五十部)

昭和五十六年

二月 會報第二十二號刊(本號より四百部)

あらたま第十號合評並に第一回活動報告會

(山の上ホテル第六回)

要望書・學校教育に於る望ましい漢字指導に

就て(文部省並に教育用漢字調査研究協力者

會議宛)

要望書・新紙幣發行による肖像畫の改廢に就

て(渡邊美智雄大藏大臣宛)

昭和五十七年

一月 贊助會員、百五十名に達す。

少年讀本第二輯國語國史の常識、千五百部刊

行(第三刷、累計四千五百部)

七月 あらたま第十三號合評並に懇親の會(東京農

林年金會館、以後七月の會も都心にて開催)

國語國史の常識第二刷、千五百部刊行。

九月 會場の都合により、例會日を以後第二日曜日

の午後に變更。

昭和五十八年

七月 少年讀本第三輯愛誦漢詩撰の編修開始。

昭和五十九年 少年讀本第三輯愛誦漢詩撰、二千部刊行。

昭和六十年 愛誦和歌發句撰第四刷、千五百部刊行。  
一月 二十九日・第一回あらたま小音樂會（船橋市東部公民館）

十二月 あらたま十年記念第二十號刊行（百二十六頁 九百五十部）

◎四月十五日、同人下坂勝洋死去。

昭和六十一年 會報第四十二號刊（本號より四百五十部）  
二月 二十九日・あらたま刊行十周年記念懇親の會（芝彌生會館）

國語國史の常識第三刷刊行（千五百部）

（會員） 昭和六十一年四月一日現在

同人 十三名

贊助會員 百八十八名

（刊行物）

○あらたま 二十點（一〜二十號）増刷一

○會報 三十九點（五〜四十三號）

○少年讀本 三點（一〜三輯）増刷五

○同胞各位に訴へる 九點（一〜九）

總計 七十七點（増刷分六點）六萬四千八百五十部

（他に會員名簿と案内計五點、千五百五十部）

（諸會合）

○研究會・八十四回 ○その他・六十一回

合計 百四十五回（打合會、幹事會は除く）

（例會テキスト冊數）  
七十九冊（參考一）

（講演會、懇談會）

○講演會・六回 ○懇談會・十六回

（外部への寄稿先數）

○論策・二十五 ○對談、講話、講演・十一

○研究發表・四 ○論文集その他・四 合計四十四

（あらたま刊行物への諸家高評數）

○あらたま（一〜二十號）九十九名百四十五評

○あらたま第二十號への特別寄稿 十六名

○少年讀本（一〜三輯） 五十三名六十六評

○同胞各位に訴へる（一〜九）への贊同者一覽

延百五十三名

（あらたまの反響）

○各種刊行物に於る、あらたま同人の活動の紹介

○記事轉載の刊行物數 十三

○紹介記事掲載の刊行物數 二十六

（會報讀書欄の紹介書目數）

○五十四冊



〈諸項目内容一覽〉

出版

- ◎昭和五十一年度 五點 九百五十部
- ◎昭報第五號、第七號、あらたま創刊號、第二號
- ◎昭和五十二年度 六點 千九百五十部
- ◎昭報第八號、第十號、あらたま第三號、第四號、同胞各位に訴へる
- ◎昭和五十三年度 六點 二千五百部
- ◎昭報第十一號、第十三號、あらたま第五號、第六號、同胞各位に訴へる(その二)
- ◎昭和五十四年度 九點 六千九百部
- ◎昭報第十四號、第十七號、あらたま第七號、第八號、愛誦和歌發句撰第一刷第二刷、同胞各位に訴へる(その三)
- ◎昭和五十五年度 八點 六千七百部
- ◎昭報第十八號、第二十一號、あらたま第九號、第十號、愛誦和歌發句撰第三刷、同胞各位に訴へる(その四)
- (他に會員名簿二百枚、荒魂之會への案内三百枚)
- ◎昭和五十六年度 七點 七千百部
- ◎昭報第二十二號、第二十五號、あらたま第十一號、第十二號、同胞各位に訴へる(その五)
- ◎昭和五十七年度 九點 九千八百五十部
- ◎昭報第二十六號、第二十九號、あらたま第十二號(増刷分)、第十三號、國語國史の常識第一刷第二刷、同胞各位に訴へる(その六)
- (他に會員名簿二百枚)
- ◎昭和五十八年度 八點 八千二百部
- ◎昭報第三十號、第三十三號、あらたま第十四號、第十

六號、同胞各位に訴へる(その七)

- ◎昭和五十九年度 九點 一萬九百部
- ◎昭報第三十四號、第三十七號、あらたま第十七號、第十八號、愛誦漢詩撰第一刷、愛誦和歌發句撰第四刷、同胞各位に訴へる(その八)
- (他に會員名簿二百二十枚)
- ◎昭和六十年度 七點 七千四百部
- ◎昭報第三十八號、第四十一號、あらたま第十九號、第二十號、同胞各位に訴へる(その九)
- ◎昭和六十一年度(四月迄) 三點 二千四百部
- ◎昭報第四十二號、第四十三號、國語國史の常識第三刷(他に會員名簿二百三十枚)
- 總計 七十七點(増刷分六點) 六萬四千八百五十部
- (この他に、會員名簿と案内、五點千五百部)

例會研究主題竝に書名一覽

- ◎昭和五十年度 二冊(十月、十一月)
- 空拳と泥濘・草枕旅にしあれば(佐藤哲夫)
- ◎昭和五十一年度 四冊
- 主題・萬葉集研究
- 新校萬葉集、日本語のこころ(渡部昇一) 肉食の思想(鯖田豊之) 閉された言語日本語の世界(鈴木孝夫)
- ◎昭和五十二年度 三冊
- 主題・精神史としての日本文學史
- 日本人の心の歴史上下(唐木順三) 死の日本文學史(村松剛)
- ◎昭和五十三年度 七冊
- 主題・王朝文化の諸相
- 平安朝の生活と文學(池田龜鑑) 世界と西歐(トイン)



ビイ) 往生要集(源信)古今集、神道集、梅干と日本刀(樋口清之)讃岐典侍日記。

◎昭和五十四年度 六册

主題・日本の中世

風姿花傳(世阿彌)英語教育大論争(平泉渉・渡部昇一)國語教育の現状(太田行藏)人間の建設(岡潔・小林秀雄)帝王後醍醐(村松剛)南洲翁遺訓(参考として)神道の成立(高取正男)

◎昭和五十五年 七册

主題一・三島由紀夫研究 主題二・日本の中世再論  
デモ・シカ教師の獨斷と偏見(中尾太郎)潮騒・文化防衛論・憂國・春の雪(三島由紀夫)狂言集、室町記(山崎正和)

◎昭和五十六年度 七册

主題一・小林秀雄著「本居宣長」通讀 主題二・三島由紀夫著「豊饒の海」通讀

日本學入門(名越時正)本居宣長(小林秀雄)豊饒の海二・三・四卷(三島由紀夫)茶の間の正義・つかぬことを言う(山本夏彦)

◎昭和五十七年度 七册

主題一・福田恆存研究 主題二・本居宣長通讀(續)  
説明的文章の讀解指導(平山寛司)文化なき文化國家・教育とは何か・私の幸福論・私の國語教室・演劇入門・人間この劇的なるもの(福田恆存)

◎昭和五十八年度 八册

主題一・近世の諸人物 主題二・本居宣長通讀(續)  
鎖國の思想(小堀桂一郎)中朝事實(山鹿素行)蘭學事始(杉田玄白)おらんだ正月・近世人物夜話・瓢箪から駒・一代男新考(森銃三)好色一代男(西鶴)

◎昭和五十九年度 十二册

主題・小林秀雄研究

宰相鈴木貫太郎・戦後思潮の超克(小堀桂一郎)小林秀雄全集第一卷・第二卷・第七卷・第八卷・第九卷・第十一卷・第十二卷 戦争は無くならない(松原正)我が皇國史觀(佐々木奎文)近代の超克

◎昭和六十年 十二册

主題一・明治大正昭和三代詩歌を讀む 主題二・現代著作家を讀む

乃木大将と日本人(ウォッシュュバアン)時流に反して(竹山道雄)東郷平八郎(下村寅太郎)月下の一群(堀口大學)我が象徴派的な人生(河上徹太郎)日本の唱歌全三册(安西愛子他)昭和詩鈔(萩原朔太郎)日本のこころ(岡潔)我が愛する詩人の傳記(室生犀星)大人のしつけ紳士のやせがまん(高橋義孝)

◎昭和六十一年度(四月迄) 四册

主題一・柳田國男・折口信夫研究 主題二・現代著作家を讀む(續)

小林秀雄(江藤淳)贗作吾輩は猫である(内田百閒)變化(吉田健一)時代と私(田中美知太郎)

合計 七十九册(他に参考として一册)

諸會合の出席者延人数一覽

◎昭和五十年 計三回 延三十一人

◎昭和五十年 二回 延二十二(平均十一人)

◎昭和五十年 一回 九人

◎昭和五十一年度 計十回 延八十二人

◎昭和五十一年度 八回 延六十(平均七・五人)

◎昭和五十一年度 二回 延二十二(平均十一人)



◎昭和五十二年度 計十二回 延百二人  
 研究會 七回 延五十一人 (平均七・三人)  
 その他 五回 延五十二人 (平均十・四人)  
 ◎昭和五十三年度 計十一回 延九十七人  
 研究會 八回 延六十八人 (平均八・五人)  
 その他 三回 延二十九人 (平均九・七人)  
 ◎昭和五十四年度 計十八回 延二百十人  
 研究會 八回 延九十人 (平均十一・三人)  
 その他 十回 延百二十人 (平均十二人)  
 ◎昭和五十五年度 計十七回 延百七十八人  
 研究會 八回 延八十五人 (平均十・六人)  
 その他 九回 延九十三人 (平均十・三人)  
 ◎昭和五十六年度 計十六回 延二百二十六人  
 研究會 八回 延八十三人 (平均十・四人)  
 その他 八回 延百四十三人 (平均十九・六人)  
 ◎昭和五十七年度 計十三回 延百九十五人  
 研究會 九回 延百七人 (平均十一・九人)  
 その他 四回 延八十八人 (平均二十二・二人)  
 ◎昭和五十八年度 計十六回 延二百三十四人  
 研究會 八回 延九十二人 (平均十一・五人)  
 その他 八回 延百四十二人 (平均十七・八人)  
 ◎昭和五十九年度 計十一回 延百四十八人  
 研究會 八回 延九十三人 (平均十一・六人)  
 その他 三回 延五十五人 (平均十八・三人)  
 ◎昭和六十年度 計十四回 延二百十三人  
 研究會 八回 延九十人 (平均十一・三人)  
 その他 六回 延百二十三人 (平均二十・五人)  
 ◎昭和六十一年度 (四月前半迄) 計四回 延六十七人  
 研究會 二回 延二十八人 (平均十四人)

その他 二回 延三十九人 (平均十九・五人)  
 (その他の會合とは、新年會合評會懇談會等を指す)  
 合計 研究會 八十四回 延八百六十九人  
 その他 六十一回 延九百十九人  
 講演會並に懇談會の講師一覽  
 講演會 六回實施 (同人の勤務校で) 計四氏  
 樋口清之氏 (二回)、村松嘉津女史、宇野精一氏、  
 石井勲氏 (二回)  
 懇談會 十六回實施、計十四氏  
 佐々木奎文氏、石井勲氏 (二回) 太田行藏氏、岩下  
 保氏、樋口清之氏、中尾昭人氏、福田恆存氏 (二  
 回) 市原豐太氏、松原正氏 (二回) 宇野精一氏、新  
 田大作氏、木内信胤氏、小堀桂一郎氏  
 (佐々木、石井、太田、岩下、村松、福田、市原諸  
 氏は他の會合にも出席)  
 外部寄稿先一覽  
 ◎論策 (定期刊行物) 計二十五  
 (定期刊行物)  
 授業研究、歴史と地理、學び方教室、世界思想、不二  
 改革者、説話、教育新聞、月曜評論、國語國字、教育  
 懇話、ことば、ポリシイ、中央公論、ふなばし朝日、  
 鹿鐵だより、フォアマン、日本、國語教室、國語フォ  
 ーラム、教育の心、生政連ニュース、東書中學英語、  
 教育創造、新勢力  
 (論文集その他) 計四  
 馬淵和夫博士退官記念説話文學論集、現代演劇協會機  
 關誌、櫻、宮下眞二遺稿集



◎對談、講話、講演  
 月曜評論、自由民主、國語教室、改革者同友會、つくし幼稚園、習志野青年會議所、鎌ヶ谷市北部公民館、八千代市高津公民館、ラジオ日本、東京教育懇話會、田口通信工業  
 ◎研究發表（教科指導關係は除く）  
 千教聯研修會、千葉教聯、日華交流教育會議、國語國字問題を考へる國民集會

計四

あらたまへの高評諸家一覽（敬稱略、到著順）

- ◎創刊號（四名）  
 金坂信一郎、永野正夫、樋口清之、名越二荒之助  
 ◎第二號（八名）  
 荒木精之、小谷惠造、鈴木由次、小柳陽太郎、北原重登、鳥井衛、阿部正路、土屋道雄  
 ◎第三號（三名）  
 坂本太郎、大石義雄、宇野精一  
 ◎第四號（五名）  
 佐々木彰、三瀧信吾、今里隆次、鐸木俊三、高池勝彦  
 ◎第五號（八名）  
 平泉雅緒、關正臣、岩下保、石義雄、西浦幸夫、寶邊正久、竹内輝芳、新田大作  
 ◎第六號（八名）  
 木村松治郎、江藤淳、早川幾忠、田邊萬平、太田行藏  
 小花和重三、藤田士郎、村松嘉津  
 ◎第七號（三名）  
 野口恆樹、白井浩司、伊豆山善太郎  
 ◎第八號（六名）  
 青山新太郎、木村松治郎、大石龜次郎、松原正、荒塚

- ◎第九號（四名）  
 椎野壽偉、小川雅照、寺嶋泰、臼井善隆  
 ◎第十號（十五名）  
 西ヶ谷充良、針谷一衛、三瀧信吾、金城和彦、青山新太郎、吉澤正晶、永野正夫、椎野壽偉、關正臣、藤田士郎、鈴木由次、田口義昌、宇野精一、岩下保、橋本忠次  
 ◎第十一號（十一名）  
 岩下保、榊原繁雄、松原正、秋元正明、木村松治郎、大沼英太郎、村松嘉津、宮下眞二、中尾昭人、鐸木俊三、幡掛正浩  
 ◎第十二號（十一名）  
 上田博和、藤井芳人、落合欽吾、新田大作、野口恆樹、小柳陽太郎、鈴木覺、竹内輝芳、高池勝彦、寶田正道、前川孝志  
 ◎第十三號（五名）  
 三浦つとむ、工藤重忠、平田宗隆、照屋佳男、倉野憲司  
 ◎第十四號（六名）  
 坂本太郎、竹内輝芳、名越二荒之助、稻川誠一、鈴木正次、野口武司  
 ◎第十五號（六名）  
 松原正、松田福松、太田行藏、木村松治郎、落合欽吾、照屋佳男  
 ◎第十六號（九名）  
 關根文之助、石井一朝、倉野憲司、佐藤孝志、石井勲、宇野精一、白井傳、長谷川三千子、山下覺辯  
 ◎第十七號（四名）



山内健生、杉田幸三、小林信夫、小堀桂一郎

◎第十八號(十四名)

佐藤通次、岩下保、森本忠、大石龜次郎、小見山登、落合欽吾、倉野憲司、小堀桂一郎、内村剛介、照屋佳男、中村榮、鈴木覺、原田種成、宇野精一

◎第十九號(六名)

居關正二郎、萩野棟省、寶邊正久、小見山登、若井勲夫、伊波隆

◎第二十號(九名)

宇野精一、平山三郎、佐々木秀信、坂本太郎、渡邊茂小見山登、照屋佳男、金城和彦、山本宏

以上 九十九人百四十五

あらたま第二十號への特別寄稿諸家一覽

(敬稱略、十六名)

岩下保、野口恆樹、照屋佳男、鐸木俊三、淺野晃、竹内輝芳、佐々木奎文、倉野憲司、村尾次郎、落合欽吾、村松嘉津、大沼英太郎、今里隆次、新田大作、中村信一郎、小堀桂一郎

少年讀本への高評諸家一覽(敬稱略)

(三十五名)

◎第一輯愛誦和歌發句撰

樋口清之、小池榮壽、名越二荒之助、上田博和、岩下保、木村松治郎、淺野晃、石井勲、新田大作、古谷進關正臣、臼田甚五郎、若井勲夫、河田梯三郎、平泉雅維、伊藤三千代、佐々木奎文、小堀桂一郎、村松嘉津中尾昭人、村尾次郎、平山寛司、鐸木俊三、所功、寶邊正久、山田貞藏、大平千枝子、矢富巖夫、木ノ下白鷗子、鳥井衛、田口義昌、荒木精之、齋藤貞幸、阿部

正路、市原豐太

◎第二輯國語國史の常識

(十五名)

淺野晃、小堀桂一郎、太田青丘、大石龜次郎、野口恆樹、宮下眞二、林巨樹、福田恆存、寶邊正久、佐藤茂佐々木奎文、青山新太郎、副島爽子、青木廣子、關正臣

◎第三輯愛誦漢詩撰

(十六名)

倉野憲司、中尾昭人、野口恆樹、川口久雄、山田貞藏、大石龜次郎、小見山登、照屋佳男、鐸木俊三、小島憲之、三浦信吾、白井善隆、寶邊正久、松村洋史、關正臣、村松嘉津

「同胞各位に訴へる」への賛同者一覽(敬稱略)

◎「日中漢字の略字共通化」なる國語破壊の策謀の阻止に就て 昭和五十二年十月

石義雄、藤井純一、森田金次、鈴木寛、佐々木奎文、西浦幸夫、鐸木俊三、關正臣、菅蒲榮光、佐々木彰、服部博次、小堀桂一郎、秋元正明、溝口健也、岩下保三、瀧信吾、保田與重郎、神守夫、伊藤喜民、幡掛正浩、小花和重三、今里隆次、大石龜次郎、木ノ下甫、平泉雅緒、木本巖生

(二十六名)

◎國語表記の正則に就ての提言

昭和五十三年十月

大石龜次郎、關正臣、上田賢治、高橋義孝、上田博和小柳陽太郎、今里隆次、田口義昌、上西左大信、新田大作、佐藤茂、矢富巖、佐々木奎文、青山新太郎、齋藤貞幸、野口恆樹、山田貞藏、淺川肇、平田宗隆、佐々木秀信、若井勲夫、白井傳、白濱裕、鎌田一步、早川幾忠、中尾昭人、鈴木昌鑑、中島哲平、加藤三之輔

(二十九名)



◎漢字制限撤廢に就ての提言 昭和五十四年十月  
 白井武夫、榊原繁雄、石田明、木村松次郎、大石龜次郎、景山直治、小川雅照、神山吉雄、宇野精一、三浦信吾、中島哲平、鈴木多喜男、小柳陽太郎、落合欽吾、關正臣、若井勲夫、河戸博詞、小堀邦夫、萩野棟省、推野壽偉、迫和宏、寺嶋泰、荒塚國男、白井傳、角田文衛、大森覺道、新田大作、寶邊正久、太田青丘、上西左大信、佐々木奎文、吉澤正晶、小西保、弘瀬清一郎、久坂總三 (三十五名)

◎郵便物等の宛名表記を正すことに就ての提言 昭和五十五年九月  
 太田行藏、佐野茂、有賀清之助、上田博和、中島哲平、木村松次郎、金城和彦、小堀桂一郎、太田青丘、大石龜次郎、佐々木奎文、小柳陽太郎、萩野棟省、鈴木多喜男、太田正弘 (十六名)

◎文の姿を保つ事に就ての提言 昭和五十六年九月  
 野口恆樹、大沼英太郎、村松嘉津、保坂弘司、上田博和、中津海茂、中尾昭人、藤澤一雄、山内健生、藤井芳人、青木廣子、久保治 (十二名)

◎國語審議會の假名遣審議に關する提言 昭和五十七年十月  
 有賀清之助、新田大作、佐々木奎文、寺田清一、杉田幸三、大沼英太郎、石井欣之助、鈴木恆男、畔上知時、神尾式春、中尾昭人、江面靜彦、上田博和 (十三名)

◎文化防衛の根幹に關する提言 昭和五十八年十月  
 有賀清之助、上田博和、小堀桂一郎、淺川肇、中島哲平、照屋佳男、若井勲夫、山本宏、中尾昭人 (九名)

◎國語表記の多樣性と統一性に關する提言 昭和五十九年十月

村松嘉津、若井勲夫、有賀清之助、小林信夫、新田大作、大森覺道、岡本幸治、乘松義雄、野田英二郎、齋藤礎雄 (十名)

◎國語破壊の是正に關する提言 昭和六十年十月  
 上田博和、乘松義雄、有賀清之助 (三名)  
 延百五十三名

あらたまの反響

◎あらたまの反響に同人の論策への言及の記事掲載  
 サンケイ新聞、新勢力、不二、神社新報、經濟論壇、人生隨順、代々木、一步園、歴史と人物、文明時評、ジャッジアンドアピール、ラジオ日本、師と友、改革者、大學漢文教育研究年會報、祖國と青年、諸君！、正論、紫の雲、自然隨順、動向、文化會議、月曜評論、活性、日本の教育、總合教育技術 (計二十六)

◎同人の論策並に同胞各位に訴へるの轉載  
 時の課題、やまと新聞、國民新聞、道の友、マスコミ文化、一步園、日本の教育、文明事評、高校と教育、大阪の教師、東海文化新聞、新聞展望、ゼンポウ (計十三)

會報讀書欄の書物一覽 五十四冊  
 省略の文學(外山滋比古) 神話からの贈物・知的生活の方法(渡部昇一) 櫻と劍(村上兵衛) 志(小林茂) なぜ日本語を破壊するのか(福田恆存他) 大和の海原(樋口清之) イソップ寓話(小堀桂一郎) ことばの人間學(鈴木孝夫) 日佛の間に在りて(村松嘉津) 續いのちささげて・言の林正續(佐藤通次) 素晴しき國日本(渡邊正廣) プロヴァンス隨筆(村松嘉津) 教育の



再生(野口恆樹) 大人のしつけ紳士のやせがまん(高橋義孝) 森鷗外文業解題創作篇・森鷗外文業解題翻譯篇・宰相鈴木貫太郎(小堀桂一郎) 道義不在の時代(松原正) 戦後教育の中で(小柳陽太郎) 内的風景派(市原豊太) 原理日本の信と學術(木村松治郎編) 敗戦參謀奮闘記(山内一臣) 日本經濟の秘密(木内信胤) ものぐさ手帖(淺野晃) 祖國復興(三瀧信吾) 新世紀の寶庫日本(名越二荒之助) 嗚呼沖繩戰の學徒隊(金城和彦) 暖簾に腕押し(松原正) 日本人の宗教心意(安津素彦) 民俗文學へのいざなひ(臼田甚五郎) 東京裁判とは何か(田中正明) 學習指導要領をどう見直したらよいか(稻川誠一) 教育基本法の問題點(上杉千年) これが正しい小中學校教科書だ(小堀桂一郎) 編(米英思想研究抄(松田福松) 日本史新論(保田與重郎) 金屬と人間の歴史(桶谷繁雄) 儒教思想(宇野精一) オイデプス王アンティゴネ(福田恆存譯) 平安朝の漢文學(川口久雄) 史書を讀む(坂本太郎) 三韓昔がたり(金素雲) エリザベスとエセックス(福田逸譯) 英語はどういう言語か(宮下眞二) 天皇物語(野中忠夫) 君し旅ゆく(坊城俊民) 歌人今上天増補版(夜久正雄) 親子で讀める天皇日本史・エピソードで綴る天皇さま(杉田幸三) 今上天皇の六十年(小堀桂一郎) 天皇御巡幸(世界日報社編)

荒魂之會來歴  
 (あらたま刊行十周年記念懇親會を機に作製)  
 編輯・發行 荒魂之會

(昭和六十一年五月二十日訂正版)

## あらたま第二十一號内容一覽

昭和六十一年四月・荒魂之會

總特輯・明治大正昭和三代詩歌案内  
 案内 新體詩・新しい詩風のうねり——翻譯詩・文語定型詩・口語自由詩の流れ

和歌・斷えることなき敷島の道

俳句・季節感と古典の姿とを傳へる

漢詩・文明開化の諸人物の精神的骨格

唱歌・文明開化の新事物を積極的に把握

作品  
 和歌(四十首)  
 俳句(四十句)  
 漢詩(十首)

新體詩(五十篇)

唱歌(二十五篇)

五十音順詩歌名一覽(百六十五篇)

討論・「わが愛する詩人の傳記」をめぐる

詩歌集案内・文庫新書収録の二十七冊と覆刻版詩歌集

三代詩歌集略年表

資料その他

昭和六十一年六月中旬刊 八十八頁 千部

頒價・四百五十圓 送料・二百圓

振替口座 東京〇——三九〇七八 荒魂之會



# 荒魂之會來歴・續

平成三年五月

〔活動内容〕 例會 毎月一回 第二日曜日（一月は新年

の連歌の會、八月は休會）。

出版 五あたらたま年二回刊 會報年四回刊

別途刊行として、少年讀本、別

冊あたらたま、その他。

（活動略記） 夫々の年度に於る新規事項、若しくは繼

續事項の初回。

◇昭和六十一年（五月以降）

五月 第十七回あたらたま懇談會（第十九回）三百

六月 さらたま第二十一號刊行（本號より千部）

七月 會報第四十四號刊行（四百五十部）

十月 同胞各位に訴へる・その十（十二）

同 第一回あたらたま關西懇談會（名古屋市、二

十二月 少年讀本第四輯愛誦文章撰、二千部刊（御在

位六十周年奉祝出版。題字・村松嘉津女史）

◎國語國字問題を考へる有志の會主催の國語國字問

題を考へる國民集會の開催（二月、七月、十一月

の三回）に當つて、企劃運営に加はつた。

◇昭和六十二年

二月 第七回活動報告會（以後、中止）

三月 賛助會員、二百一名に達す。

七月 例會に於て唱歌村祭を齊唱す。（以後定例、

但し、一月には一月一日、二月には紀元節、

四月には天長節、十一月には明治節と定む）

◎國語國字問題を考へる有志の會主催の第四回國語

國字問題を考へる國民集會の開催（十二月）に當

つて、企劃運営に加はつた。又、國語國字問題を

考へる有志の會の國語國字問題資料第一冊の刊行

（七月刊、B五判二十四頁）に當つて、編輯に加

はつた。

◇昭和六十三年

二月 會報第五十號巻頭に、「昭和六十三年聖上米

壽の賀を壽ぎ奉る」といふ賀詞を掲載す。

七月 三日・福田恆存全集完結記念並に福田恆存先

生喜壽の賀祝賀會。（芝彌生會館）

別冊あたらたま其の一・正統表記の實踐、二百

部刊行。

荒魂之會名簿刊行（從來の隔年四月刊を七月

刊に改む）。

○同人十二名、賛助會員二百七名。

十月 同胞各位に訴へる・その十二（今回で終了）

會報第五十三號刊行。巻頭に福田恆存全集第

一卷評を掲載（以後、第八巻の最終巻迄、順

次掲載）。

十一月 鎌倉史蹟散策（一泊二日）

◎國語國字問題を考へる有志の會主催の第五回國語

國字問題を考へる國民集會の開催（十一月）に當

り、企劃運営に加はつた。

◇昭和六十四年平成元年

一月 深川周邊史蹟散策並に先帝陛下の御遺徳を偲

び奉る會（當初の豫定では、深川周邊の史蹟

散策の後で第十三回連歌の會を行ふものであ

つたが、一月七日先帝陛下崩御に鑑み、連歌

の會を改める。會の冒頭に於て先帝陛下の御神靈に黙禱を捧げ、恆例の唱歌一月一日は中止。尚、新年の史蹟散策は以後定例にす。會報第五十四號卷頭に、「謹みて昭和の御世を送り平成の御世を迎へ奉る」といふ章句を掲載す。

○例會の唱歌は二月二十四日の御大葬に鑑み紀元節を海ゆかばに改む。二月二十四日の御大葬當日には皇居前竝に新宿邊に各自參集して、御見送り奉つた。

四月 第十三回連歌の會。唱歌天長節は花に改む。會報第五十五號卷頭に、「奉祝大日本帝國憲法發布百周年」の章句を掲載す。調査・定期刊行物に於る年表示の實態、三頁七百五十部刊行。

七月 別冊あらたま其の二・夜麻登志宇流波斯（先帝陛下奉悼文集。題字・落合欽吾氏）、三百部刊行。

十月 世田谷史蹟散策（靖國神社遊就館に於て、昭和天皇の御敬神を偲ぶ特別展を拜觀）。會報第五十七號に、物故七先生の紙碑を掲載少年讀本第五輯言葉盡しの編修の分擔をす。例會の唱歌天長節（二十三日が天長の佳節）は先帝陛下の諒闇中につき、螢の光に改む。贊助會員宛の年末の挨拶状に、先帝陛下の諒闇中につき、平成二年年頭の御挨拶は遠慮申上げたき旨を記す。

十一月 同

十二月 同

◎同人小川雅照、豐源太の筆名にて、「國語の復権」を上梓す。（八月、洛風書房刊）

◇平成二年（皇紀二千六百五十年）一月二十八日、第十四回新年連歌の會。諒闇は明けぬ。唱歌一月一日を歌ひ、會場（向島、百花園）の床の間には柿本人麻呂像を掲げた。（以後定例とす）白瀬中尉南極探検の日に因み、日中の史蹟は白瀬中尉南極探検記念碑を訪ね、隅田川周邊の地を巡つた。（史蹟散策は本年中に七回實施）

二月 會報第五十八號刊行。卷頭に、「奉祝・皇紀二千六百五十年竝に今上陛下御即位の御大典」といふ章句を掲げた。又、新刊紹介欄に先帝陛下の御遺著「皇居の植物」を謹載。十一月・少年讀本第五輯言葉盡し第一回編修會。（第十二回）

三月 會報第五十九號刊行。「石井勳先生の菊池寛賞受賞に寄せて」（荒井眞弓）を掲載。又、卷頭に、「平成二年・日露戦争勝利八十五周年三月十日奉天大會戦五月二十七日日本海海戦」の章句を掲載。

四月 調査・新聞に於る年表示と表記との實態、四頁、九百部刊行。

同 同

六月 同

十月 同

十一月 同

◎少年讀本全五輯の累計、一萬六千部。



十一月(日)例会。國旗を掲げ、國歌竝に明治節を齊唱。十二日(月)御大典。皇居前廣場に參集。十七日(土)奉祝提燈行列。皇居前廣場に參集。十八日(日)一般參賀。あらたま十五年記念第三十號刊行。(百二十六頁、千部)

十二月十六日(日)例会。唱歌天長節竝に平成の御代をたたえんを齊唱。

◇平成三年(皇紀二千六百五十一年)

一月二十日(日)谷中、根津、千駄木、根岸の史蹟散策竝に第十五回新年連歌の會(會場・笹乃雪)唱歌一月一日竝に平成の御代をたたえんを齊唱。

二月 會報第六十二號刊行。「同人回顧・あらたまの十五年」(十二人)を掲載。

四月 會報第六十三號刊行。連歌の會十五回の詠草竝に少年讀本第五輯言葉盡し諸家高評(十六人)を掲載。

五月 別冊あらたま其の三・かりがね集刊行。(三十六頁、三百部。題字・平山寛司氏)

同 荒魂之會來歴・續(私家版)刊行。(八頁、六十部)

同 十二月(日)例会終了後、物故者慰靈祭を齋行。(御嶽神社に參拜、祭典は中臺町會館)

〔會員〕  
平成三年五月一日現在 同人 十四名  
贊助會員 百九十五名  
〔刊行物〕  
○あらたま 十點(二十一、三十號)

○會報 二十點(四十四、六十三號)  
○少年讀本 二點(四輯五輯)  
○別冊あらたま 三點(其の一、三)  
○同胞各位に訴へる 三點(十、十二)  
○調査 二點  
總計 四十點 三萬三千九百五十部 (他に會員名簿二點五百部)

(あらたま創刊號以降、百十一點九萬八千八百部)  
〔諸會合〕

○研究會・四十七回 ○その他・五十回  
合計 九十七回(打合會、幹事會は除く)

〔例会テキスト冊數〕五十四點五十八冊  
〔懇談會・祝賀會〕

○懇談會・三回 ○祝賀會・一回  
〔外部への寄稿先數〕

○論策・十六 ○研究發表他・三 合計十九  
〔あらたま刊行物への諸家高評數〕

○あらたま(第二十一、三十號)五十二人六十一評  
○あらたま諸號の質問に對する諸家回答數  
二十四號・二十六號・二十八號・三十號

○少年讀本(四輯五輯) 四十七人五十三回答  
○同胞各位に訴へる(十、十二)への贊同者數 延十九名

〔あらたまの反響〕  
○各種刊行物に於る、あらたま竝に同人の活動の紹介  
○紹介記事掲載の刊行物數 六五  
○記事轉載の刊行物數 二二

〔會報讀書欄の紹介書目數〕

○六十四冊

(會報卷頭記事)(今回より掲載)

○五十七篇(第七號より掲載、第六十三號迄)

へ諸項目内容一覽

出版

◎昭和六十一年度(五月以降)六點 八千九百部

會報第四十四號、第四十五號、あらたま第二十一號、

第二十二號、同胞各位に訴へる(その十)、少年讀本

第四輯愛誦文章撰

◎昭和六十二年度 七點 五千八百部

會報第四十六號、第四十九號、あらたま第二十三號、

第二十四號、同胞各位に訴へる(その十一)

◎昭和六十三年度 八點 六千部

會報第五十號、第五十三號、あらたま第二十五號、第

二十六號、同胞各位に訴へる(その十二)、別冊あら

たま其の一・正統表記の實踐(他に會員名簿二百五十

部)

◎昭和六十四年平成元年度 八點 四千八百五十部

會報第五十四號、第五十七號、あらたま第二十七號、

第二十八號、調査・定期刊行物に於る年表示の實態、

別冊あらたま其の二・夜麻登志宇流波斯(先帝陛下奉

悼文集)

◎平成二年度 八點 七千二百部

會報第五十八號、第六十一號、あらたま第二十九號、

第三十號、調査・新聞に於る年表示と表記との實態、

少年讀本第五輯言葉盡し(他に會員名簿二百五十部)

◎平成三年度(五月迄)三點 千二百部

會報第六十二號、第六十三號、別冊あらたま其の三、

かりがね集(諸家高評集)

例會研究主題竝に書名一覽

◎昭和六十一年度(五月以降)九冊

主題一・柳田國男折口信夫研究 主題二・現代著作家を讀む

折口信夫全集第一卷、先祖の話(柳田國男)木綿以前の

事(柳田國男)折口信夫全集第七卷、妹の力(柳田

國男)折口信夫全集第三卷、海上の道(柳田國男)遠

野物語(柳田國男)折口信夫全集第二十三卷

◎昭和六十二年度 十二冊

主題一・日本浪曼派研究 主題二・福田恆存全集を讀

む 保田與重郎全集第四卷、福田恆存全集第一卷、保田與

重郎全集第十卷、天の夕顔(中河與一)福田恆存全集

第二卷、定本淺野晃全詩集、伊東靜雄詩集、福田恆存

全集第三卷、日本史新論(保田與重郎)田園の憂鬱

(佐藤春夫)福田恆存全集第四卷、我が萬葉集(保田

與重郎)

◎昭和六十三年度 十冊

主題一・近世典籍を讀む 主題二・福田恆存全集を讀

む(繼續)

近世畸人傳(伴蒿蹊)福田恆存全集第五卷、五輪の書

(宮本武藏)奥の細道(松尾芭蕉)福田恆存全集第六

卷、西洋紀聞(新井白石)雨月物語(上田秋成)海國

兵談(林子平)日本外史(頼山陽)初山踏(本居宣

長)

◎昭和六十四年平成元年度 十點十四冊

主題一・幕末維新の人々 主題二・福田恆存全集を讀

む(繼續)

南洲翁遺訓、一外交官の見た明治維新(サトウ)福田



恆存全集第七卷、水川清話（勝海舟）長崎海軍傳習所の日々（カッテンデイク）橘曙寛歌集、福田恆存全集第八卷、啓發録（橋本左内）日本浮屠實記（ゴロウニ）講孟節記（吉田松陰）

◎平成二年度 十册

主題一・小林秀雄保田與重郎研究 主題二・少年讀本第五輯の編修

保田與重郎全集第五卷、保田與重郎全集第八卷、本居宣長補記（小林秀雄）保田與重郎全集第十五卷、保田與重郎全集第二十七卷、保田與重郎全集第十七卷、白鳥・宣長・言葉（小林秀雄）浪漫派變轉（淺野晃）保田與重郎全集第三十二卷、保田與重郎全集第三十六卷

◎平成三年度（四月迄）三册

主題・明治諸人物研究  
東洋の理想（岡倉天心）代表的日本人（内村鑑三）日本開化小史（田口卯吉）

諸會合の出席者延人數一覽

◎昭和六十一年度（四月後半以降）

計十一回 延百九十二人

研究会 六回 延六十九人（平均十一・五人）

その他 五回 延百二十三人（平均二十四・六人）

◎昭和六十二年度 計十二回 延百八十三人

研究会 八回 延九十人（平均十一・三人）

その他 四回 延九十三人（平均二十三・三人）

◎昭和六十三年度 計十五回 延二百十八人

研究会 十回 延百五人（平均十・五人）

その他 五回 延百十三人（平均二十二・六人）

◎昭和六十四年平成元年度 計十七回 延二百五人

研究会 十回 延百十九人（平均十一・九人）

その他 七回 延八十六人（平均十二・三人）

◎平成二年度 計三十四回 延二百八十一人

研究会 十回 延百三人（平均十・三人）

その他 二十四回 延百七十八人（平均七・四人）

◎平成三年度（四月迄）計八回

研究会 三回 延二十七人（平均九人）

その他 五回 延五十二人（平均十・四人）

（その他の會合とは、新年會合評會懇談會等を指す）

合計 九十七回 延千五百五十八人

研究会 四十七回 延五百十三人

その他 五十回 延六百四十五人

（回数では九十七回であるが、研究会に續いて合評會を行ふやうな例を勘案すれば、日數では八十一日である。この中には鎌倉に於る宿泊一が含まれる。）

懇談會、祝賀會の講師客人一覽

懇談會 三回實施 計三氏

阿部正路氏、落合欽吾氏、福田恆存氏（落合氏は他の會合にも出席）

祝賀會 一回實施

福田恆存氏（福田恆存全集完結記念並に福田恆存先生喜壽の祝賀會）

外部寄稿先一覽

◎論策（定期刊行物）

改革者、營業情報、月曜評論、リーダー、不二、國民新聞、神道學、教育正論、道の友、國學院雜誌、日本の教育、神社新報、日本、赤門合氣道、古書通信、葛

西南高紀要

計十六(三十七篇)

◎研究發表、他  
日華教育研究會、國語國字問題を考へる國民集會、中京テレビ  
計三(八回延十二人)

あらたまへの高評諸家一覽(敬稱略、到著順)

◎第二十一號・總特輯明治大正昭和三代詩歌案内(十名)

中河與一、中尾昭人、鈴木恆男、粉川宏、野口恆樹、倉野憲司、小田村寅二郎、河田悌三郎、照屋佳男、中村粲

◎第二十二號・總特輯現代著作家案内(八名)

矢野健太郎、日比義也、大谷豪見、小林道德、竹内俊隆、小田村四郎、岡田則夫、粉川宏

◎第二十三號・總特輯柳田國男折口信夫小論(四名)

阿部正路、中河與一、小柳陽太郎、所功

◎第二十四號・總特輯日本國辭書批判(六名)

小堀杏奴、中村保男、倉野憲司、松田福松、柏谷嘉弘、今野宏

◎第二十五號・總特輯日本浪漫派小論(五名)

中河與一、幡掛正浩、長岡千尋、柏谷嘉弘、奧西保

◎第二十六號・總特輯日本國教科書批判再論(八名)

小見山登、中澤伸弘、佐々木彰、太田稔、金子善光、吉田良次、仙北谷晃一、石川洋子

◎第二十七號・總特輯近世の諸人物(八名)

森洋、小見山登、鐸木俊三、村尾次郎、森田康之助、井上順理、市川靜夫、石井欣之助

◎第二十八號・總特輯近世の學舍(四名)

落合欽吾、山田輝彦、吉澤正晶、富士信夫

◎第二十九號・總特輯幕末維新の諸人物小論(三名)

辻森秀英、今野宏、白井傳

◎第三十號・總特輯國語と國史と國體と(五名)

林三郎、山口宗之、横地末次郎、仙北谷晃一、所功

あらたま諸號の質問に對する回答諸家一覽(敬稱略、到著順)

◎第二十四號・辭書に關する質問への回答

所功、小林道德、工藤重忠、橋本忠次、宇野精一、福田逸、竹内輝芳、白井傳、粉川宏、若井勳夫(十名)

◎第二十六號・教科書に關する質問への回答

田中正明、岩下保、三瀧信吾、名越二荒之助、粉川宏、倉野憲司、宇野精一、木南卓一、居關正二郎、照屋佳男、杉田幸三、山口康助、白濱裕、石井勳、青木廣子、平山寛司、高池勝彦(十七名)

◎第二十八號・近世の學舍に關する質問への回答

中河與一、川口久雄、加地伸行、小出昌洋、金子善光、山内健生、若井勳夫、角山素天、遠山和夫(九名)

◎第三十號・國史の諸人物に關する質問への回答

村尾次郎、小田村寅二郎、山田輝彦、橋本忠次、松田福松、小見山登、關正臣、岡本幸治、上田三三生、森田康之助、幡掛正浩、三瀧信吾、山本宏、小田村四郎、小谷幸雄、市川靜夫、平山寛司(十七名)

少年讀本への高評諸家一覽(敬稱略、到著順)

◎第四輯愛誦文章撰

中河與一、大石龜次郎、倉野憲司、名越二荒之助、照屋佳男、朝比奈正幸、鐸木俊三、石井勳、竹内輝芳、落合欽吾、橋本眞知子、關正臣、安齋隆、高池勝彦、



粉川宏 (十五名)

◎第五輯言葉盡し

白井傳、橋本忠次、上田三三生、原田種成、宇野精一、照屋佳男、平山三郎、山田輝彦、日比義也、阿部正路、笹目善一郎、粉川宏、北村倫子、三瀨信吾、萩野貞樹、高池勝彦 (十六名)

「同胞各位に訴へる」への賛同者一覽(敬稱略、到著順)

その十・國語國字問題の新たなる危機に關する提言  
「現代假名遣い」竝に國語表記の機械處理に就て

角山素天、小林信夫、鈴木恆男、有賀清之助、小田村四郎 昭和六十一年十月十日(金) (五名)

◎その十一・國語審議會の責務に關する提言―社會一般の面目を保つ爲に 昭和六十二年十月十八日(日) 有賀清之助、佐々木奎文、角田文衛、白崎秀雄、加地伸行、人魚同人會高岡 (六名)

◎その十二・外來語の濫用とその要因とに就て 昭和六十三年十月二日(日) 渡邊茂、小見山登、關正臣、研岡正浩、椎野壽偉、中澤伸弘、森洋、匿名 (八名)

あらたまの反響

◎あらたま竝に同人の論策への言及の記事掲載  
楠葉だより、日本の教育、波、教育正論、青森毎日

計五(七回)

◎同人の論策竝に同胞各位に訴へるの轉載  
伊丹師友、青森毎日

計二

會報讀書欄の書物一覽 六十四冊

首丘の人大西郷(平泉澄) 月夜車(森銑三) 自衛隊よ胸を張れ(松原正) 言葉の幸ふ國(市原豐太) 武器としてのことば(鈴木孝夫) ことばの意味とこころ(石井勳) 明治と昭和(村松嘉津) 國定教科書(粉川宏) 日本憲法要論(三瀨信吾) ジョージ・オーエル(照屋佳男) 福田恆存全集全八卷、リチャード二世(福田恆存譯) 日本歴史の特性(坂本太郎) 傳統意識の美學(村尾次郎) 日本の祝祭日(所功) 天の夕顔前後(中河與一) 漱石邸幻想(阿部正路) 凸型西洋文化の死角(岡本幸治) 隨聞・日本浪漫派(淺野晃・檜山三郎) 世界に生きる日本の心(名越二荒之助) スターリン獄の日本人(内村剛介) 王朝漢詩選(小島憲之編) 漱石世界と草枕繪(川口久雄) 京の朝晴れ(角田文衛) 今上天皇論(小堀桂一郎) 逆日本史全四卷(樋口清之) 二葉亭四迷と明治日本(桶谷秀昭) 戦後世代からの發言(國民文化研究會) ことばの社會學(鈴木孝夫) 名譯と誤譯(中村保男) 日本語の再發見(石井勳) 日本文學における漢語表現(小島憲之) 現代川柳のサムシング(今野空白) 範例による文章表現(萩野貞樹) 私の見た東京裁判(富士信夫) アジアに生きる大東亞戰爭(アセアンセンター編) やまと心―日本の精神史(森田康之助) 愛戀無限(中河與一) 岡倉天心論攷(淺野晃) 狐物語の世界(原野昇・鈴木覺・福本直之) 斷然缺席(阿川弘之) 福田恆存と戦後の時代(土屋道雄) 近代主義を超えて(小林道憲) 物いふ小箱・びいどろ障子・史傳閑歩・傳記文學初雁(森銑三) 漢字小百科辭典(原田種成編) 聖帝昭和天皇をおおぐ(日本を守る國民會議編) 天皇とその時代(江藤淳)



昭和天皇論・續（小堀桂一郎）歴代天皇の帝王學（杉田幸三）天皇―その論の變遷と皇室制度（大原康男）昭和天皇の御製（眞世界運動本部編）

會報卷頭記事一覽

○第七號より掲載。第八號より第二十三號迄は題名中に「文化」の語を用ゐる、第二十四號以降は卷頭記事欄の名稱として「我が文化防衛」の語を用ゐる。

偽善、獨善、無知の横行する教育界（本間一誠）文化を支へる人々（吉田道明）文化を守る仕事（駒井鐵平）無駄と文化（下地正信）漢字と文化（駒井鐵平）土地と文化（伊勢崎康幸）名前と文化（駒井鐵平）文化を亡ぼすもの（川畑賢一）死者と文化（本間一誠）季節感と文化（下坂勝洋）傳統と文化（角山正之）市井の文化（富澤敏彦）文化繼承の實踐（太田正弘）文化繼承の一視點（土屋秀宇）學校は非文化地帯（三宅義藏）文化繼承と國語教科書（若井勳夫）非文化的愚論を排す（高橋裕子）文化なき歴史授業を排す（平田光寛）この頃氣になること（太田正弘）小著發刊に寄せて（平山寛司）「現代かなづかい」の幻想（前川孝志）國語國史の常識刊行に就て（駒井鐵平）幼兒に與へるべきもの（三宅義藏）不易なるべきものの決定（佐藤哲夫）吾が子が爲した漢詩百首暗誦（片岡正彦）大和魂・詩魂を求めて（中村敬司）「現代かなづかい」から假名遣へ―假名遣論者の爲すべき事―（上田博和）「日本國憲法」の假名遣（藤澤一雄）苦闘の日々の中で―新米教師の正統國語實踐（大橋伊佐男）愛誦漢詩撰の刊行に就て（川畑賢一）言葉を極む三つのヒント（伊波隆）正字を正字とすべし（大沼英太）

郎）戰爭體驗のある社長へ（小川雅照）「舊漢字舊假名教育」を擁護する（越川四郎）國語と子ども（青木廣子）土俵際の正統表記（高崎一郎）漢字漢詩指導今日この頃（荒井眞弓）あらたま第二十一號・明治大正昭和三代詩歌案内に就て（倉成）法學部正字學科卒業見込（松村洋史）矛盾と杞憂と（中澤伸弘）老人の回顧―福田恆存全集刊行に寄す（落合欽吾）愛誦文章撰の刊行に就て（角山正之）毛筆が育てた文字への嚴肅な態度（土屋秀宇）悲願に向かつて早十二年（佐々木秀信）國語國字問題を考へる有志の會の活動に就て（高池勝彦）福田恆存全集の完結に當て（中尾昭人）普遍的眞實を語る文藝批評・福田恆存全集第一卷（根岸清文）理解といふ美德への疑ひを説く・福田恆存全集第二卷（小川雅照）物事を根本から考へる・福田恆存全集第三卷（平山寛司）「常識」の強靱にして直ぐなるもの・福田恆存全集第四卷（萩野貞樹）「素朴な現實主義」の勝利・福田恆存全集第五卷（青木英實）教へと感動と・福田恆存全集第六卷（太田稔）人間らしい人間の生き方・福田恆存全集第七卷（川畑賢一）劇作家福田恆存・福田恆存全集第八卷（最終卷）（駒井鐵平）君民一體の國の本相・平成の御大典を迎へて（三瀧信吾）巻物の學級日誌（竹内孝彦）言葉盡しの刊行に就て（大橋伊佐男）

荒魂之會來歴・續

へあらたま刊行十五周年を機に作製  
平成三年五月二十六日（日）二訂版  
編輯・發行  
荒魂之會



# 荒魂之會來歴・其の六

平成二十三年六月  
◇平成十八年一月から平成二十二年十二月迄◇

## 内容

活動内容 例會 讀書會以外の例會並に散策の内容一覽  
出版

活動略記 夫々の年度に於る新規事項若しくは繼續事項  
の初回 會員 刊行物 諸會合 同人による外部への

寄稿・發表先 荒魂之會刊行物への諸家高評數 あら  
たまの反響 會報讀書欄の紹介書目數 會報各欄の記

事 例會の國歌並に唱歌の齊唱 人物曆の朗讀 例會  
に於る各種音聲並に映像の鑑賞 散策の行程に於る各

種藝能鑑賞

諸項目内容一覽

刊行物 例會の研究主題に關する書名一覽 諸會合の  
出席延人數 あらたま史蹟散策一覽 各種記念の會の

内容 連歌の會・合評會・例會の第二部(追悼會以外)  
其の他、同人による外部への寄稿、發表先一覽、あら

たまへの高評諸家一覽 あらたまの諸號の質問に對す  
る回答諸家一覽 あらたまの反響 會報各欄一覽、

讀書欄の書物 春夏秋冬欄 尚藏館逍遙欄 哀悼記  
紙碑・昭憲皇太后基金收益配分先一覽 調査・全國各

紙に於る歌會始御儀の記事の實態 調査・全國(首都  
圏)各紙に於る元旦の皇室記事の實態 荒魂之會の來

歴(全五回)連歌の會の詠草)例會の國歌並に唱歌齊  
唱の一覽 人物曆の朗讀 例會に於る各種音聲並に映

像の鑑賞一覽 散策の行程に於る各種藝能鑑賞一覽  
荒魂之會の各種提言並に調査一覽

あらたま編輯後記一覽(第六十一號から第七十號迄)  
備考・私家版の各種印刷物

二一 二 二 九 九 二 二 九 九 二 二 九 九 二 二 九 九

## 活動内容

例會・毎月一回、主として第一日曜日の午後(八月は休會)

・ 一月は新年連歌の會を行ひ、唱歌一月一日を齊唱す。他の  
月は讀書會、萬葉集輪讀、日本書紀輪讀、三田村鳶魚著江  
戸生活事典輪讀、唱歌齊唱を中心とす。例會の第二部と  
して發送を行ふ月の夕食會に、順次、福田恆存を語る夕、  
大名を語る夕、紫式部を語る夕を設けてゐる。

・ 定例の會場は船橋市内の中臺町會館  
・ 例會以外では適宜、散策並に懇談會其の他を行つてゐる。

## 讀書會以外の例會並に散策の内容一覽

一、連歌の會(昭和五十一年十二月より、年一回。昭和五十四年よ  
り一月に改む。平成二十二年一月十日・第三十四回開催。)二、唱  
歌齊唱(昭和六十一年四月に初回、昭和六十二年七月より定例にす。  
毎月)三、尚藏館展拜觀(平成七年より、散策の行程に加ふ。)四、  
天長節、地久節、御大婚奉祝の國歌齊唱(地久節・平成八年十月に初  
回、十一年より定例。天長節・平成十年十二月、御即位十年奉祝の  
夕の國歌齊唱を機に以後定例にす。御大婚・平成十六年四月に御大  
婚四十五周年を奉祝して初回、二十一年四月に御大婚五十周年を奉  
祝して再度、二十二年より定例にす。國歌齊唱は、皇室の慶事に關  
して適宜齊唱す。)五、敷島の道逍遙選歌(平成九年十月より、年一回。  
平成二十二年五月、其の二十五を以て敕撰和歌集よりの選歌を終へ、  
以後は主題別の選歌を行ふ。)六、先儒祭參列(平成九年十月より、散  
策の行程に加ふ。)七、孔子祭參列(平成十年四月より、散策の行程に  
加ふ。)八、會報に謹載の御歴代御製の奉詠(平成十一年十月より、年  
四回。)九、宮中歌會始御儀錄畫拜見(平成十二年二月初回、以後  
定例にす。)十、萬葉集輪讀(平成十三年二月より毎月。)十一、森  
銑三著偉人曆朗讀(平成十四年七月より定例、毎月。)十二、福田  
恆存を語る夕(平成十五年より年に二回若しくは一回。平成二十二  
年二月で第十二夜。)十三、正倉院展錄畫拜見(平成十五年十一月  
に初回、以後定例にす。)十四、東海道行脚(平成十六年一月、第



一步。以後散策の行程に加ふ。十五、荒魂之會回顧(別途作物の輪讀・平成十六年二月より四年間・毎月。平成十九年十二月終了。)十六、大名を語る夕(平成十七年四月より四年間、年二回若しくは一回實施。平成二十年十月、第六夜を以て終了。)十七、芭蕉行脚(平成十八年四月、第一步。以後散策の行程に加ふ。)十八、日本書紀輪讀(平成二十年二月より毎月。)十九、三田村鳶魚著江戸生活事典輪讀(平成二十一年二月より三年間・毎月。)十九、名園逍遙(平成二十一年五月、其の一。以後散策の行程に加ふ。)二十、紫式部を語る夕(平成二十一年七月より年に一回、三年間。)二十一、幕末史蹟散策(平成二十二年一月第一步。以後散策の行程に加ふ。)二十二、物故諸先生への黙禱、追悼會、弔問・墓參(二十三、靖國神社みたま祭への獻燈竝に參拜。二十四、御縁の方々への各種色紙の染筆。附・自炊の會(平成十三年より、年一回二月、平成十七年を以て中止。))

出版・あらたま(年二回)六月、十二月 各七百部 會報(年四回)二月、四月、七月、十月、各三百部 會報別號廻燈籠(平成十七年より・年一回)少年讀本、別冊あらたま、提言(續同胞各位に訴へる・平成十四年より・年一回(會報に掲載の別刷を各界に送呈する。))

### 活動略記

夫々の年度に於る新規事項、若しくは繼續事項の初回

◇平成十八年(皇紀二千六百六十六年)◇

主題一・近世の諸學 主題二・萬葉集輪讀其の六 主題三・荒魂之會回顧三(荒魂之會刊別途作物の輪讀)別途・福田恆存を語る夕、大名を語る夕

一月十四日(土)新年會。〔平成十八年度第一回散策(東海道行脚第三步(藤澤))〕福田恆存先生十三回忌墓參(大磯・妙大寺)〔第三十回連歌の會(大磯・國よし)〕平成二十二年・第三十四回〔三名〕〔三七名〕〔一名〕

二月五日(日)例會。〔新年歌會始御儀錄畫拜見(二月の恆例)〕〔あらたま第六十號合評會。山下覺辯氏、平成十七年九月十四日逝去の報に接し、黙禱を捧ぐ。宮原サワ刀自に和菓子賞味の御禮の

色紙を染筆す。會報第百二十二號刊。卷頭に「平成十八年・あらたま刊行三十周年の文言を記す。荒魂之會二十七年から三十一年迄の來歴(一)竝にあらたま連歌の會第二十一回以後詠草◇第二十六回から第三十回迄◇を掲載す。(來歴は(二)(三)を七月刊の會報に分載す。)

三月五日(日)例會。(あらたま第六十二號掲載の「昭和天皇の教科書教育敕語」の討論)あらたま三十周年記念作物の同人による題字三點(紙碑・清水、三十年乃回顧・加藤、福田恆存回顧・桑原)を回覽す。

四月九日(日)例會。〔近世の諸學其の一・玉くしげ秘本玉くしげ〕〔物故諸先生慰靈祭竝に偲ぶ會(齊主・中澤伸弘氏)會報第百二十三號刊。卷頭に「豫告◇あらたま刊行三十周年記念懇親會◇期日・十一月三日(金・祝)會場・東京都内」の文言を記す。〕

四月二十三日(日)芭蕉行脚第一步(尚藏館展、湯島聖堂他)六名五月二十三日(日)古文書拜見の會(京都・角田文衛先生邸)四名六月四日(日)例會。〔近世の諸學其の三〕〔大名を語る夕第三夜。〕

あらたま第六十一號刊。(四十四頁・八百部)、討論記事中に十二行の紙幅を求め、季語の響・新年の小記事を掲載し、以後毎號の常設の記事とす。◎兩陛下のタイ、シンガポール行幸啓の平安を祈念して國歌を齊唱す。

七月二日(日)例會。〔あらたま第六十一號合評會〕福田恆存を語る夕第七夜。會報第百二十四號刊。「調査・全國二十四日刊紙に於る平成十八年歌會始御儀の記事の實態」を掲載す。荒魂之會名簿刊(同人・十名、贊助會員・百四十七名)。

九月三日(日)例會。〔平成十九年度以降、平成二十八年年度(あらたま刊行四十周年)迄の十年間の荒魂之會の活動の概略〕の冊子を同人に配布す。渡邊正廣氏の逝去につき黙禱を捧ぐ。

十月一日(日)例會甲(福田恆存を語る夕第八夜・黒潮)會報第百二十五號竝に別冊あらたま其の九・風信帖(題字・土谷まつ江)刊。會報に「同胞各位に訴へる續の五・何を言つてゐるのか?」からなくなる、物の名を失はせる假名表記」竝に第八十五回昭憲皇太后基金收益配分先一覽を掲載す。同胞各位に訴へる・續の五



を朗讀す。(定例)

十月二十八日(日) 例會乙 近世の諸學其の五 〔あらたま刊行三十周年記念懇親會の準備會。會報に掲載の同胞各位に訴へる・續の五を朗讀す。萩野貞樹氏に送呈の病氣平癒祈願の色紙を染筆す。〕

◎地久節奉祝の國歌を齊唱す。(十月の定例)

十一月三日(金・祝) 〔あらたま刊行三十周年記念懇親會(芝彌生會館 參會者・十八名) 福田恆存講演並に中村吉右衛門古事記朗讀の音聲披露。懇親會次第以下十二點の各種資料を配布。〕

◎國歌並に明治節を齊唱す。

十一月十九日(日) 例會。正倉院展録畫拜見(十一月の定例) 白田甚五郎、鈴木克則兩氏の逝去につき默禱を捧ぐ。十一月三日の會の出席者への當日の寫眞を封入した禮狀の發送作業をす。

十二月十日(日) 例會。あらたま第六十二號刊。(六十八頁・八百部) 〔あらたま刊行三十周年記念の私家版作物の内、「荒魂之會活動二十七年から三十一年迄の五箇年間の各種參加狀況」を配布す。會報別號・廻燈籠其の二刊。◎天長節奉祝の國歌を齊唱す。(十二月の定例)〕

◇平成十九年(皇紀二千六百六十七年)◇  
主題一・歐米體驗記 主題二・萬葉集輪讀其の七 主題三・荒魂之會回顧四 別途・福田恆存を語る夕、大名を語る夕

一月十三日(日) 新年會。〔平成十九年度第一回散策(武藏野御陵・多摩御陵他) 第三十一回連歌の會(殿ヶ谷戸庭園紅梅亭) 〕

〔一〕七名 〔三〕三名 〔二〕三名  
二月四日(日) 例會。〔あらたま第六十二號合評會 福田恆存を語る夕第九夜(福田恆存翻譯全集第一卷・別席・黒潮) 會報第百二十六號刊。卷頭に「平成十九年奉祝・主權恢復五十五周年(四月二十八日)昭和の日(四月二十九日)施行」の文言を記す。村尾次郎氏逝去につき默禱を捧ぐ。多田顯、讚井丈夫、上田三三生の三氏に病氣平癒祈念、山口宗之氏に八秩の賀、宮坂印刷に社業發展の色紙を染筆す。〕

三月四日(日) 例會(あらたま第六十四號掲載の書物並にバーゼル

よりの討論) 「うみのおくやま」の記事例見込一覽を回覽す。色紙送呈への禮狀(宮坂健三、讚井丈夫、山口宗之三氏) 並に渡部昇一、渡邊雅子刀自の禮狀を回覽す

三月二十五日(日) 第二回散策・沼津(主權恢復五十五周年並に昭和の日施行奉祝・沼津御用邸記念公園、若山牧水記念館他(荒天の爲に、沼津から三島迄の東海道行脚は中止にす) ◎終了後、大磯の福田恆存先生墓所に詣で、福田恆存全集全八卷再讀(福田恆存を語る夕) 終了の墓前の報告をす。五名

四月八日(日) 例會。〔歐米體驗記其の一・「米歐回覽實記」 瑞穂の國の言葉盡し刊行會(別席・黒潮) 會報百二十七號刊。〕同胞各位に訴へる續の六・教へられるべき事が教へられてゐない、明治天皇聖蹟の史蹟指定解除の撤回を望む」を掲載す。別冊あらたま其の十・瑞穂の國の言葉盡しを配布す。

四月二十一日(土) 皇居(尚藏館展拜觀) 靖國神社、乃木神社巡拜、主權恢復五十五周年記念國民大會(三階修學院主催) 乃木神社尚武館) 三名

五月十三日(日) 例會。スウェーデン並にバルト三國、英國に行幸啓の兩陛下の平安を祈念して國歌を齊唱す。郡司勝義氏の逝去に當り默禱を捧ぐ。

六月三日(日) 例會。あらたま第六十三號刊。  
七月一日(日) 例會。〔千葉縣護國神社參拜、千葉公園逍遙(大賀蓮の見物) 〕〔あらたま第六十三號合評會 大名を語る夕第五夜 會報第百二十八號刊。調査・全國十二日刊紙に於る平成十九年歌會始御儀の記事の實態並に第八十六回昭憲皇太后基金收益配分先一覽を掲載す。〕

八月二十五日(土) 第三回散策・波の伊八の故地巡訪 五名  
九月二日(日) 例會。〔平成二十年度以降の活動の概略に就て〕を配布す。佐竹義宣、中村やよひ御二方に御見舞の色紙を染筆す。私家版・山下覺辯三回忌追悼文集刊。山下覺辯氏以下七名の九月の物故諸先生の御靈に默禱を捧ぐ。

九月十五日(土) 芭蕉行脚第三步(奥の細道首途の碑、他) 七名  
十月十四日(日) 例會。〔歐米體驗記其の五〕 故佐藤哲夫先生を

偲ぶ會（別席・黒潮）◎鐵道記念日のこの日、鐵道唱歌全五集の齊唱が終了す。

十一月十八日（日）例會。多田顯、鈴木俊雄兩氏の逝去に當り默禱を捧ぐ。同人市川靜夫君の平成二十年度より會員への所屬の變更に當り、十二年間の交遊を謝し今後の浦安の日々を祈念して色紙を染筆す。

十二月九日（日）例會。○歐米體驗記其の七〇故佐藤哲夫先生御遺宅を弔問す。あらたま第六十四號刊。（六十二頁・目次裏に「日本書紀奇譚・捕鳥部萬と其の飼犬と」を掲載し、以後定例とす。別刷附録・「荒魂之會發足以來三十二年間の課題の書物一覽及びシエイクスピア言葉盡しの例句」會報別號・廻燈籠其の三刊。

◇平成二十年（皇紀二千六百六十八年）◇

主題一・近代の隨筆を讀む 主題二・萬葉集輪讀其の八 主題三・日本書紀輪讀其の一 別途・福田恆存を語る夕、大名を語る夕 同人異動 贊助會員より同人へ・松本泉 同人より贊助會員へ・加藤征司、市川靜夫 平成二十年度同人・九名 贊助會員 百四十四名

一月十二日（日）新年會。○平成二十年度第一回散策（芭蕉行脚第四歩（報恩寺他））○第三十二回連歌の會（向島百花園）○九名（昭和三十六年の第五回以降、絶えて見られぬ女流二名・土谷まつ江、田中芳惠兩刀自の出席あり。）

二月三日（日）例會。○あらたま第六十四號合評會○福田恆存を語る夕第十夜（別席・黒潮）節分の日につき、豆撒をす。新井寛、仙北谷晃一、宇野精一、鈴木由次四氏の逝去に當り默禱を捧ぐ。松本泉君の同人加入に當り、「荒魂之會發足以來三十三年間に於る同人の異動」を配布す。日本書紀輪讀を始む。會報第百三十號刊。（本號より二百部）巻頭に「平成二十年・奉祝御即位以來二十年・源氏物語寛弘五年以來千周年」の文言を記す。

三月二日（日）例會。○近代の隨筆を讀む其の一・一國の首都。土偶誌五百號祝並に佐藤茂、大澤正道兩氏への本復祝の色紙を染筆す。○故宇野精一先生を偲ぶ會（別席・黒潮）五名

三月三十日（日）故落合欽吾先生十三回忌、故宇野精一先生當年忌の御遺邸弔問 二名

四月十三日（日）例會（あらたま第六十六號掲載の「排蘆小船・石上私淑言」の討論）萩野貞樹氏の逝去に當り默禱を捧ぐ。吉原一美氏よりの「竹島の二萬五千分の一の地圖」の回覽をす。會報第百三十一號刊。「同胞各位に訴へる續の七・知らされるべき事が知らされてゐない、再び同胞感の涵養に關する提言」を掲載す。

五月六日（火・振替休日）東海道行脚第四歩（京都・三條大橋から山科迄）並に京都文化博物館・源氏物語千年紀展見學 七名  
五月十一日（日）例會。夜久正雄氏の逝去に當り默禱を捧ぐ。劇團昂公演「ジュリアス・シーザー」の觀劇者を募る。

六月一日（日）例會。あらたま第六十五號刊。（四十四頁・七百部）角田文衛氏の逝去に當り默禱を捧ぐ。吉原一美氏に送呈する竹島の地圖を圍む例會寫眞を寫す。

七月六日（日）例會。○あらたま第六十五號合評會○故角田文衛先生を偲ぶ會（別席・黒潮）會報第百三十二號刊。全國十二日刊紙に於る平成二十年歌會始御儀の記事の實態並に第八十七回昭憲皇太后基金收益配分一覽を掲載す。荒魂之會名簿刊（同人・九名、贊助會員・百四十一名）

八月二十三日（日）第三回散策・尚藏館展拜觀と東京灣納涼船、他  
九月七日（日）例會。「うめのおくやま」の第二次記事の提出。

十月十九日（日）例會。○近代の隨筆其の五○大名を語る夕第六夜（終了、別席・黒潮）會報第百三十三號刊。紙碑其の六（石井勲、富士信夫、村尾次郎、多田顯、佐藤哲夫五先生の追悼記）を掲載す。會報第百三十三號の發送に際し、同號に、哀悼記・紙碑、書評を掲載した物故諸先生八名の御遺族にも送呈す。

十一月十六日（日）例會。あらたま第六十六號（十二月刊）の校正を行ふ。頁數の削減に伴ひ本號より後期の號も校正は再校迄とす。訂正數・初校（百九十四）再校（三十七）御大婚奉祝諸神社巡拜の日取りを平成二十一年三月二十二日（日）と定む。

十二月十四日（日）例會。○川崎市市の稱名寺參拜（四十七土畫像拜見）○近代の隨筆其の七○本年度會報に掲載の物故諸先生（十三



柱)を偲ぶ會(別席・黒潮)例會清規新版(七訂版)を配布す。あらたま第六十六號刊。(五十四頁・七百部、別刷附録・「敷島の道逍遙・二十一代集竝に新葉和歌集選歌一覽」會報別號・廻燈籠其の四刊。

◇平成二十一年(皇紀二千六百六十九年)◇

主題一・自傳、書簡、見聞記を讀む 主題二・萬葉集輪讀其の九  
主題三・日本書紀輪讀其の二 主題四・三田村鳶魚著江戸生活  
事典輪讀其の一 別途・福田恆存を語る夕、紫式部を語る夕  
同人異動 同人より贊助會員へ・桑原草子、松本泉 平成二十一年  
度同人・七名 贊助會員・百三十九名

一月十一日(日)新年會 平成二十一年度第一回散策(東海道行脚  
第五歩(三島から沼津迄) 第三十三回連歌の會(若山牧水記念  
館) 九名 一名

二月二十二日(日)例會。 〔あらたま第六十六號合評會〕福田恆存  
を語る夕第十一夜(別席・夢庵) 江戸生活事典の輪讀を始む。相  
賀徹夫、佐藤茂、内村剛介三氏の逝去に當り黙禱を捧ぐ。會報第  
百三十四號・宇野精一追悼特輯號刊。

三月十五日(日)例會(自傳、書簡、見聞記其の一・北棧聞略)岡  
田則夫氏への「御平癒ヲ欣ビ浦安ノ日々ヲ念ズ」の色紙を染筆す。  
三月二十二日(日)御大婚五十周年奉祝巡拜(明治神宮、東郷神社、  
乃木神社、皇居、靖國神社)の結びとして護國寺に詣で、故宇野  
精一先生一周忌の墓參をす。四名。

四月五日(日)例會。 〔御大婚五十周年奉祝の國歌を齊唱す。(以  
後、四月の定例にす。〕 〔あらたま第六十八號掲載の「東海道中  
膝栗毛」の討論(郡順史、田口義昌兩氏の出席)。會報第三百三十  
五號刊。卷頭に「奉祝・御大婚五十周年・四月十日」の文言を記  
す。

五月十日(日)例會。郡順史先生の米壽を壽ぐ色紙を染筆す。  
五月三十一日(日)第二回散策・名園逍遙其の一(皇居東御苑(尚  
藏館展拜觀)三百人劇場蹟、六義園、舊古河庭園)八名

六月十四日(日)例會。山田輝彦氏の逝去に際し黙禱を捧ぐ。自由

竝に諸君!の廢刊の報に接し、夫々の創刊號を回覽す。あらたま第  
六十七號刊。(四十四頁・七百部・編輯方針三條に記されたる「先  
人」の語は、芥川龍之介の指摘に隨つて、本號より「古人」の語に  
改める旨を編輯後記に記す。)

七月五日(日)例會。 〔あらたま第六十七號合評會〕紫式部を語  
る夕第一夜(別席・夢庵) 〔五名〕一名(土田龍太郎氏)

會報第三百三十六號刊。 同胞各位に訴へる續の八・御の字は御の  
字の儘に、常用漢字表は撤廢の秋に至つてある一竝に第八十八回  
昭憲皇太后基金收益配分先一覽を掲載す。 〔兩陛下にはカナダ行  
幸啓の平安を祈念して國歌を齊唱す。桑原草子女史よりの到來の  
榮太樓本舗の銘菓を賞味し、夏日甘味至福の色紙を染筆す。〕

八月二十三日(日)尚藏館・御成婚五十年御即位二十年記念特別展  
「兩陛下、想い出と絆の日々」を拜觀し、千鳥ヶ淵墓苑、靖國神  
社の巡拜をし、神保町古書店街を経て豪徳寺に詣で、故樋口清之  
先生十三回忌の墓參をす。三名

九月六日(日)例會。阿修羅像を運ぶの録畫を上映す。長崎縣護國  
神社よりの御神饌を配布す。吉原一美氏に病氣平癒祈願の色紙を  
染筆す。江戸生活事典に關聯して、草津宿本陣の寫眞を回覽す。

十月十八日(日)例會(自傳、書簡、見聞記其の五・福翁自傳)角  
田文衛一周忌追悼特輯號の會報第三百二十七號の刊行に當り、紫女  
讚歌の音盤を拜聽す。劇團昂「河の向こうで人が呼ぶ」の招待券竝に  
割引券の案内狀を配布す。

十月二十五日(日)第三回散策・東海道行脚第六歩(平塚から大磯  
迄)の終了後、妙大寺に詣で故福田恆存先生十六回忌の墓參をす。  
十一月十五日(日)例會。井上順理氏、太田絢子女史の逝去に際し  
黙禱を捧ぐ。潮音十一月號(太田青丘生誕百年記念特輯號)を  
回覽す。福田恆存先生十六回忌(十一月二十日)に因み、國語改  
革批判論二篇の初出誌である知性昭和三十一年二月號七月號二冊  
を回覽す。故井上順理氏の皇學祭講演の録畫を拜見す。東京大學  
日本史研究室よりのあらたまの缺號に關する書狀三通竝に吉原一  
美氏の色紙の禮狀を回覽す。新年連歌の會の會場候補の山本邸紹  
介の記事を配布す。



十二月十三日(日) 例會。緒方武臣氏の逝去に際し黙禱を捧ぐ。中澤伸弘氏に神道學博士號取得を祝す色紙を染筆す。荒魂之會同人の經費負擔に就て(掲載費四訂分を明記)を配布す。あらたま第六十八號刊。(四十八頁・七百部、別刷附録・「あらたま誌掲載の訪問記に示されたる訪問先一覽」他)會報別號・廻燈籠其の五刊。

◇平成二十二年(皇紀二千六百七十年)◇

主題一・人間論を讀む 主題二・萬葉集輪讀其の十 主題三・日本書紀輪讀其の三 主題四・三田村鳶魚著江戸生活事典輪讀其の二 別途・福田恆存を語る夕、紫式部を語る夕

同人異動・平成二十二年度同人七名(十一月二十九日、秋田勝紀逝去で六名) 贊助會員・百三十九名(會費免除の乙種會員を定む)

一月十日(日) 新年會。〔平成二十二年度第一回散策(幕末史蹟散策)〕 策第一步(佐倉) 〔第三十四回連歌の會(舊堀田邸)〕。長谷川等伯展の案内を配布す。 〔二十一名(宮川輝男氏他) 二名(土田龍太郎氏)〕

二月十四日(日) 例會。〔あらたま第六十八號合評會〕 福田恆存を語る夕(別席・黒潮) 上田三三生氏の逝去に當り、黙禱を捧ぐ。

例會資料配布の種別を定め、別途配布分の作製は以後、特別の場合を除いて取止め、甲・配布、乙・併載、丙・回覽の三種によつて行ふ。會報第三百三十八號刊。卷頭に「平成二十二年・教育救語 換發百二十周年・私の國語教室刊行五十周年・三島由紀夫歿後四十周年」との文言を記す。

三月七日(日) 例會(人間論を讀む其の一・翁問答) 佐藤辰夫、中山典之氏の逝去に際し、黙禱を捧ぐ。福田恆存評論集續刊八巻の案内を配布す。

四月四日(日) 例會。御大婚五十一周年(四月十日) 奉祝の國歌を齊唱し、以後毎年四月の例會の定例とす。福田敦江刀自(卒壽祝) 田中佩刀氏(見舞) 太田稔氏(見舞) 三方に色紙を染筆す。太田稔、川上清美兩氏に送呈する例會の寫眞を撮影す。會報第三百三十九號刊。「調査・全國十二日刊紙に於る平成二十二年歌會始御儀の記事の實態」を掲載す。

五月二日(日) 例會。〔あらたま第七十號掲載の「文章讀本」の討論〕 敷島の道逍遙其の二十五・敕撰和歌集拾遺・人の選歌(敕撰和歌集よりの選歌は今回で終了し、次回からは個別主題による。)

五月二十三日(日) 第二回散策・名園逍遙其の二(東御苑(尚藏館展拜見) 後樂園、小石川植物園を巡訪。雨天につき、芭蕉行脚第五歩の分(小石川、本郷)は中止にす。

六月六日(日) 例會。安藝由夫氏の卒壽祝の色紙(慶祝卒壽日日佳日)を染筆す。新會員前田哲男君(大阪の學生)の初出席あり、記念撮影をす。あらたま第六十九號刊。(四十四頁・七百部) 會報別號・廻燈籠其の六刊。(從來の十二月刊を改む。)

七月四日(日) 例會。〔あらたま第六十九號合評會〕 紫式部を語る夕(別席・黒潮) 國學院大學公開古典講座の開催要項を配布す。會報第四百十號刊。「同胞各位に訴へる續の九・國語といふ大河を涸渇させる事勿れ、常用漢字表の廢止を望む」並に第八十九回昭憲皇太后基金收益配分先一覽を掲載す。荒魂之會名簿刊。(同人・七名、贊助會員・百三十九名)

九月十二日(日) 例會。〔録畫廣重の東海道五十三次鑑賞〕 人間論を讀む其の四・風土。中村黎氏の逝去に當り、黙禱を捧ぐ。中島哲平、池澤嘉夫兩氏への病氣見舞の色紙を染筆す。あらたま刊行三十周年記念行事通覽第二分冊・荒魂之會同人の三十年餘の各種活動一覽を同人に配布す。

十月十七日(日) 例會。〔人間論を讀む其の五・人間であること〕 會報に掲載の紙碑欄(物故諸先生十一柱の追悼記) 輪讀。長岡千尋、服部知司、渡邊華靖三氏の夫々の祝事を壽ぎ色紙を染筆す。中島哲平氏御夫妻並に池澤嘉夫氏の禮狀を回覽す。特別展東大寺大佛並に三井記念美術館圓山應舉展の案内を配布す。

十月二十四日(日) 第三回散策。甲州街道猿橋宿並に芭蕉行脚第五歩。終了後、鳥澤墓地に故石井勳先生七回忌の墓參をす。

十一月十四日(日) 例會。あらたま第七十二號(平成二十三年十二月刊) 掲載の子を思ふ歌十六首の選を行ふ。あらたま刊行三十周年記念行事通覽第一分冊・あらたま刊行三十周年記念懇親會の纏めを同人に配布す。あらたま第七十號の再校をす。訂正數 初校



(百七十四)再校(八十五)

十二月十二日(日)例會。あらたま第七十號刊。(三十五年記念號・五十八頁・七百部、別刷附録・あらたま既刊號案内(第六十號から第六十九號迄)他

### 會員

平成二十二年十二月一日現在 同人・六名 贊助會員・百三十九名  
◎發足以來 同人・三十九名 贊助會員・四百九十五名

### 刊行物

あらたま(年二回刊)十點(第六十一號から第七十號迄)

〔部數の削減〕平成十八年六月刊の第六十一號より千部から二百部減の八百部、平成二十年六月刊の第六十五號より八百部から百部減の七百部に變更す。計七千四百部

〔紙幅の削減〕平成十七年六月刊の第五十九號より、前期の號の五十頁建を二頁減の四十八頁に、平成十八年六月刊の第六十一號より更に四頁減の四十四頁に變更し、以後これを定例にす。後期の號は、平成十七年十二月の第六十號の百頁建を最多のものとし、以後、第六十二號は六十八頁、第六十四號は六十二頁、第六十六號は五十四頁、第六十八號は四十八頁に減じ、四十八頁を以て後期の號の頁建と定む。但し、平成二十二年十二月刊の第七十號はあらたま刊行三十五周年の記念號につき、五十八頁建にす。

〔自家印刷の別刷〕紙幅の削減に應じ、後期の號の各種資料は自家印刷の別刷にす。平成十九年十二月刊の第六十四號の荒魂之會發足以來三十二年間の課題の書物一覽及びシェイクスピア言葉盡しの例句(B五判四頁)を附録の嚆矢とし、第六十六號の敷島の道道遙二十一代集並に新葉和歌集選歌一覽(A五判十二頁)、第六十八號のあらたま誌掲載の訪問記に示されたる訪問先一覽、諸國一宮一覽、海外の神社數(B五判二頁)、第七十號のあらたま既刊號案内(第六十號から第六十九號迄)福田恆存評論集案内、福田恆存戯曲全集案内、宇野精一國語國字論案

内、宇野精一著作集案内(B五判四頁)と續く。

〔定期欄の新設〕季語の響欄(平成十八年六月刊の第六十一號より每號掲載)日本書紀奇譚(平成十九年十二月刊の第六十四號より後期の號に掲載)

別冊あらたま(隨時刊)二點(其の九・風信帖(題字・土谷まつ江)三百部 其の十・掌篇古典讀本瑞穂の國の言葉盡し(題字・清水潤子)五百部 計八百部) 累計・四千部

會報あらたま(年四回刊)二十點(第百二十二號から第百四十一號迄)〔部數の削減〕平成十八年二月刊の第百二十二號より、四百五十部を四百部に改む。平成二十年二月刊の第百三十號より百部を減じ、三百部に定む。計六千八百部

會報別號・廻燈籠(隨時刊)五點(其の二から六迄)〔刊行時期の變更〕其の五迄は毎年十二月の刊、其の六は六月の刊。自家印刷・其の二から其の五迄は各百七十部、其の六は百六十部。計八百四十部 累計・千十部

提言・同胞各位に訴へる(會報に年に一度掲載の同内容の別刷)五點(續の五から九迄)續の五から七迄は各五百部、續の八からは五百五十部 計二千六百部 累計・三萬四千八百部

計四十二點一萬八千四百四十部(他に會員名簿・三點五百十部)◎會報第五號の公刊以降、二百六十二點十八萬三千四百四十部(平成二十三年二月十日刊の會報第百四十二號の「あらたま刊行三十五周年の昨今」には部數の計上に脱落があり、平成十八年以後の五箇年間の一萬八千九十部は、三百五十部を加へて一萬八千四百四十部に改め、これを加へた荒魂之會三十五年餘の全刊行物の部數は、十八萬三千四百四十部に改める。)

### 諸會合

研究會・四十回 其他・六十四回(内、史蹟散策・二十二回、各種記念の會他・四十二回)合計百四回◎發足以來の累計は別記例會の課題の書物・五十三點五十四冊(内、再讀七點 通讀の繰越分一點、同新規分三點)

各種記念の會・八回 連歌の會、合評會、例會の第二部・二十七回



外部への寄稿・發表先 (二)

荒魂之會刊行物への諸家高評數

あらたま (第六十一號から第七十號迄) 二十七名三十篇  
あらたま諸號の質問に對する諸家回答數・六十二號、六十四號、六十六號、六十八號、七十號 計五回・二十六名二十七篇

あらたまの反響

・荒魂之會刊行物竝に同人の論策への言及の記事の掲載の刊行物  
・同人の論策竝に同胞各位に訴へる他の提言の掲載の刊行物

會報讀書欄の紹介書目數・二十四冊

會報各欄の記事

卷頭・春夏秋冬欄 (第二百二十二號より第四百一十一號迄)・十八名二十篇 (同人・六名七篇、會員・十二名十三篇)

東西南北欄 (無)

尚藏館逍遙欄 (第二百二十九號、第三百十號、第三百二十八號)・三篇 (同人・一名一篇、會員・二名二篇)

哀悼記・平成元年十月刊第五十七號の「紙碑・懐しき人々」から平成二十二年十月刊第四百一十一號の其の七迄、四十七篇。◎今回掲載

昭憲皇太后基金收益配分先一覽・平成七年十二月刊あらたま第四十號に第七十四回昭憲皇太后基金收益配分先一覽を掲載。七年後の平成十四年十月刊の會報あらたま第九號に掲載の「教養の衰頽

を坐視する事勿れ」同胞各位に訴へる・續の一◇に第八十一回昭憲皇太后基金收益配分先一覽を併載す。以後、單獨の記事として、

毎年七月若しくは十月の會報に順次掲載し、平成二十二年七月刊の第四百十號に於て、第八十九回の掲載に至る。◎今回掲載

調査・全國各紙に於る歌會始御儀の記事の實態・平成十三年五月刊の「日本の正氣恢復の爲に、荒魂之會提言竝に調査」に全國六十

二日刊紙に於る平成十三年元旦の皇室記事竝に歌會始の御儀の記

事の掲載の實態を嚆矢として、平成十四年以降、歌會始の御儀の記事は年に一度の會報への掲載を續ける。元旦の皇室記事は平成十五年四月刊の第四百一十一號に掲載した「同胞感の涵養の源泉を涸渇させる事勿れ、我々は何處にゐるのか」同胞各位に訴へる・續の二◇に併載以後、平成二十年四月の第四百三十一號に掲載の「知らされるべき事が知らされてゐない、再び同胞感の涵養に關する提言」同胞各位に訴へる・續の七◇に併載し、平成二十一年以降は「首都圏六紙に於る元旦の皇室記事」を單獨の小記事として二月刊の號に掲載す。◎今回掲載

荒魂之會の來歴・平成八年四月刊の第八十三號に「荒魂之會二十一年の來歴」を掲載す。以後五年毎に荒魂之會の會合の摘要の記事の掲載を續ける。◎今回掲載

連歌の會の詠草・平成三年四月刊の第六十三號に「あらたま連歌の會・詠草 (昭和五十一年から平成三年迄)」を再掲載をす。以後、第三百三號、第二百二十三號の三度の掲載によつて第三十回迄を掲載す。◎今回掲載

例會の國歌竝に唱歌の齊唱

國歌・天長節、地久節、行幸啓竝に皇室の慶事の際に歌ふ。  
唱歌 (定例) 四曲・一月一日 (一月) 紀元節 (二月) 明治節 (十一月) 天長節 (十二月) (恆例) 年度毎の選曲・七曲

人物曆の朗讀

毎月の例會資料に記載せられたる森銚三著偉人曆正續四冊の其の月の人物の小傳を擔當者が朗讀をする。◎今回掲載

例會に於る各種音聲竝に映像の鑑賞

平成七年十一月五日 (日) の新潮カセットブック・福田恆存譯ハムレット (音聲) から平成二十二年十一月十四日 (日) の正倉院展 (映像) 迄の十五年間に二十四種・三十三回。◎今回掲載

散策の行程に於る各種藝能鑑賞



昭和五十四年一月八日(土)の落語から平成二十年十二月二十三日(火・祝)の落語迄の三十二年間に十種十五回。◎今回掲載

### 「諸項目内容一覽」

刊行物(自家印刷以外の作物は全て宮坂印刷の製作である。)

會報・年四回刊(二月、四月、七月、十月) B五判四頁 四百部・平成二十年度より三百部

あらたま・年二回刊(六月、十二月) A五判 八百部・平成二十年

度より七百部

別冊あらたま・隨時刊 A五判

會報別號廻燈籠・年一回隨時刊 B六判一頁(自家印刷)

提言・同胞各位に訴へる・續(年一回、會報に掲載記事の別刷) B

五判二頁(平成二十一年度の續の八より自家印刷に改む)

◇平成十八年度◇九點四千七百七十部

會報・第百二十二號、第百二十三號、第百二十四號、第百二十五號

計千六百部 あらたま・第六十一號(四十四頁)第六十二號(六十

八頁)計千六百部 別冊あらたま其の九・風信帖(百二十四頁・十

月刊)三百部 會報別號・廻燈籠其の二(B六判一頁・十二月刊)

百七十部 同胞各位に訴へる・續の五◇何を言つてゐるのかが分か

らなくなる・物の名を失はせる假名表記◇(會報第百二十五號に掲載

の別刷・B五判二頁・十月刊)五百部(他に會員名簿二頁・自家版・七

月刊)百八十部

◇平成十九年度◇九點四千三百七十部

會報・第百二十六號、第百二十七號、第百二十八號、第百二十九號

計千六百部 あらたま・第六十三號(四十四頁)第六十四號(六十

二頁)計千六百部 別冊あらたま其の十・瑞穂の國の言葉盡し(二

十八頁・四月刊)五百部 會報別號・廻燈籠其の三(B六判一頁・

十二月刊)百七十部 同胞各位に訴へる・續の六◇教へられるべき事

が教へられてゐない明治天皇聖蹟の史蹟指定解除の撤回を望む◇(會

報第百二十七號に掲載の別刷・B五判二頁・四月刊)五百部

◇平成二十年度◇八點三千二百七十部

會報・第百三十號、第百三十一號、第百三十二號、第百三十三號

計千二百部 あらたま・第六十五號(四十四頁)第六十六號(五十  
四頁)計千四百部 會報別號・廻燈籠其の四(B六判一頁・十二月  
刊)百七十部 同胞各位に訴へる・續の七◇知らされるべき事が知  
らされてゐない・再び同胞感の涵養に關する提言◇(會報第百三十  
一號に掲載の別刷・B五判二頁・四月刊)五百部(他に會員名簿二頁・  
自家版・七月刊)百八十部

◇平成二十一年度◇八點三千二百七十部

會報・第百三十四號、第百三十五號、第百三十六號、第百三十七號

計千二百部 あらたま・第六十七號(四十四頁)第六十八號(四十

八頁)計千四百部 會報別號・廻燈籠其の五(B六判一頁・十二月

刊)百七十部 同胞各位に訴へる・續の八◇御の字は御の字の儘に

・常用漢字表は撤廢の秋に至つてゐる◇(會報第百三十六號に掲載

の別刷・B五判二頁・七月刊)五百部

◇平成二十二年度◇八點三千三百十部

會報・第百三十八號、第百三十九號、第百四十號、第百四十一號

計千二百部 あらたま・第六十九號(四十四頁)第七十號(五十八

頁)計千四百部 會報別號・廻燈籠其の六(B六判一頁・六月刊)

百六十部 同胞各位に訴へる・續の九◇國語といふ大河を涸渇させ

る事勿れ・常用漢字表の廢止を望む◇(會報第百四十號に掲載の別

刷・B五判二頁・七月刊)五百五十部

### 例會の研究主題に關する書名一覽

主題一・毎年設定 主題二・萬葉集輪讀(平成十三年度より開始)

主題三・日本書紀輪讀(平成二十年度より開始) 主題四・三田村鷲

魚著江戸生活事典輪讀(平成二十一年度より開始)

◇平成十八年度(主題一・近世の諸學)◇十一點

玉くしげ秘本玉くしげ、日暮硯、日本水土考・水土解辯増補華夷通

商考、政談、木村兼葭堂のサロン、柳子新論、塵劫記、別途討論・昭和

天皇の教科書教育救語、大名を語る夕・大名の日本地圖(其の三其の

四)福田恆存を語る夕・福田恆存全集第七卷第八卷(再讀)

◇平成十九年度(主題一・歐米體驗記を讀む)◇十一點

米歐回覽實記(一)、歐米見聞録、新編プロヴァンス隨筆、スター



リン獄の日本人、ヨーロッパの旅、歐洲の四季、テムズとともにも、別途討論・書物、バーゼルより、大名を語る夕・大名の日本地圖(其の五)福田恆存を語る夕・福田恆存翻譯全集第一卷(再讀)

◇平成二十年度(主題一・近代の隨筆を讀む)◇十一點十二冊

一國の首都、泣菫隨筆、鏑木清方隨筆集、寺田寅彦隨筆集第一卷、漱石の思ひ出、鷗外の思ひ出、摘錄斷腸亭日乘(上下)、谷崎潤一郎全集第三十卷、別途討論・排蘆小船船上私淑言、大名を語る夕・大名の日本地圖(其の六・終了)福田恆存を語る夕・福田恆存翻譯全集第二卷(再讀)

◇平成二十一年度(主題一・自傳、書簡、見聞録を讀む)◇十點

北槎聞略、芭蕉書簡集、仙境異聞勝五郎再生記聞、折たく柴の記、福翁自傳、松蔭書簡集、幕末維新懷古談 別途討論・東海道中膝栗毛、福田恆存を語る夕・福田恆存翻譯全集第三卷(再讀)紫式部を語る夕・紫式部傳・その生涯と源氏物語(其の一)

◇平成二十二年度(主題一・人間論を讀む)◇十點

翁問答、二宮翁夜話、人生論風に、風土、人間であること、手仕事の日本、忌み名の研究 別途討論・文章讀本 福田恆存を語る夕・福田恆存翻譯全集第四卷(再讀)紫式部を語る夕・紫式部傳・その生涯と源氏物語(其の二)

◇五箇年間の計・五十三點五十四冊◎昭和五十年十月の例會開始以降、平成二十二年十二月迄の三十五年餘の累計・三百九點三百二十二冊(内、二十二點を再讀) 參考・三點

◎平成十六年から平成十九年迄の四箇年間の、課題の書物とは別に、「荒魂之會回顧」として別途作物四點(平成元年刊・別冊あらたま其の二・夜麻登志宇流波斯(先帝陛下奉悼文集)、平成二年刊・少年讀本第五輯言葉盡し、平成五年刊・別冊あらたま其の七・ふみくら、平成十一年刊・愛誦詩歌文章撰大八洲第二部)を例會に於て輪讀す。

### 諸會合の出席延人数

◇平成十八年度◇計二十四回・延百五十三人(平均六・三人)  
研究會 八回・延四十五人(平均五・六人)

其の他 十六回・延百八人(平均六・八人)  
◇平成十九年度◇計二十三回・延百二十三人(平均五・三人)  
研究會 八回・延四十二人(平均五・三人)

其の他 十五回・延八十一人(平均五・四人)

◇平成二十年度◇計二十二回・延百二十五人(平均五・七人)  
研究會 八回・延四十一人(平均五・一人)

其の他 十四回・延八十四人(平均六人)

◇平成二十一年度◇計十八回・延百六人(平均五・九人)  
研究會 八回・延四十三人(平均五・四人)

其の他 十回・延六十三人(平均六・三人)

◇平成二十二年年度◇計十七回・延百十四人(平均六・七人)  
研究會 八回・延四十五人(平均五・七人)

其の他 九回・延六十九人(平均七・七人)

合計 百四回・延六百二十一人(平均六人)

研究會 四十回・延二百六十六人(平均五・四人)

其の他 六十四回・延四百五十五人(平均六・三人)

・其の他の會合とは、新年連歌の會、合評會、例會の第二部、各種記念の會、散策、諸先生御遺邸への弔問、墓參等である。回数では百四回であるが、例會の第二部や散策に續いて連歌の會を行ふ例や車中泊を伴ふ旅行の例を勘案すると、日數では七十六日である。

◎昭和五十年十月の例會の開始以來、平成二十二年十二月の例會に至る三十五年餘の諸會合の累計・研究會 三百六十六回・延二千六百五十六人(平均七・三人) 其の他 三百五十七回・三千四百五十六人(平均九・九人) 合計 六百五十九回・延六千百二十二人(平均九・三人)

あらたま史蹟散策一覽(二十二回實施)

◇平成十八年(四回)◇

一月十四日(土) 一 東海道行脚第三步(藤澤宿) 二 福田恆存先生墓參(一) 七名(一名)

四月二十三日(日) 芭蕉行脚第一步(尚藏館展、湯島聖堂、西新井

大師他)(六名)



五月二十三日(日) 古文書拜見の會(法住寺、後白河院御陵、豊國神社、角田文衛先生邸他)(四名)

七月十五日(土) 芭蕉行脚第二步(尚藏館展、みたままつり參拜、日本橋、芭蕉句碑、寶井其角宅蹟、上野・芭蕉句碑)(四名)

◇平成十九年(五回)◇

一月十二日(土) 武藏野御陵多摩御陵參拜他(十名)  
三月二十五日(日) 沼津(沼津御用邸記念公園、若山牧水記念館他) 竝に福田家墓參(福田全集全八卷再讀終了の報告)(五名)

四月二十一日(土) 尚藏館展、靖國神社、乃木神社巡拜(三名)  
八月二十五日(土) 波の伊八の故地巡訪(玉前神社他)(五名)

九月十五日(土) 芭蕉行脚第三步(奥の細道首途の碑他)(七名)

◇平成二十年(五回)◇

一月十二日(土) 芭蕉行脚第四步(報恩寺他)(九名)  
五月六日(火・振替休日) 東海道行脚第四步(京都・三條大橋から山科迄・京都文化博物館他)(七名)

八月二十三日(土) 尚藏館展、濱離宮庭園(東京灣納涼船(八名)二名)

十二月十四日(日) 川崎市稱名寺(四十七士像拜見)(三名)  
十二月二十三日(火・祝) 天長節參賀・靖國神社、千鳥ヶ淵墓苑巡拜(淺草演藝場(落語見物)(三名)一名)

◇平成二十一年(五回)◇

一月十一日(日) 東海道行脚第五歩(三島から沼津迄)(九名)  
三月二十二日(日) 御大婚奉祝諸社巡拜(明治神宮、東郷神社、乃木神社、皇居東御苑、靖國神社) 竝に宇野精一先生墓參(四名)

五月三十一日(日) 名園逍遙其の一(皇居東御苑、尚藏館展、六義園、舊古河庭園他)(八名)

八月二十三日(日) 皇居東御苑、尚藏館展、千鳥ヶ淵墓苑、靖國神社、豪徳寺(樋口清之先生墓參)(三名)

十月二十五日(日) 東海道行脚第六歩(平塚宿から大磯宿迄)

福田恆存先生墓參(五名)三名

◇平成二十二年(三回)◇  
一月十日(日) 幕末史蹟第一歩(佐倉)(十二名)

五月二十三日(日) 名園逍遙其の二(皇居東御苑、尚藏館展、小石川後樂園、小石川植物園)(十一名)

十月二十四日(日) 芭蕉行脚第五歩(猿橋宿) 石井勲先生墓參(五名)三名

計二十二回 昭和六十四年平成元年以來の累計・百十一回

・百十一回の内、皇居參入を含む分は三十四回、尚藏館展の拜觀は平成七年以降、二十八回である。

各種記念の會の内容

祝賀會・三(あらたま刊行三十周年記念懇親會、瑞穂の國の言葉盡し刊行會、平成二十年奉祝の荒魂之會行事(天長節參賀、諸社巡拜、寄席見物) 累計十三回) 追悼會・五(あらたま刊行三十周年記念物故諸先生慰靈祭竝に偲ぶ會、故佐藤哲夫先生を偲ぶ會、故宇野精一先生を偲ぶ會、故角田文衛先生を偲ぶ會、物故諸先生を偲ぶ夕・累計十九回)

連歌の會、合評會、例會の第二部(追悼會以外)、其の他

連歌の會・五(平成二十二年一月で第三十四回) 合評會・十(毎年二月、七月) 福田恆存を語る夕・六(累計十二) 大名を語る夕・四(累計六・終了) 紫式部を語る夕・二、物故諸先生の弔問墓參・六家九回(累計二十八家五十九回)

同人による外部への寄稿、發表先一覽

國語國字第九十號(平成二十年五月刊)、「論語竝に孟子講座の十一年」 駒井鐵平) 文學研究會第五回ワークシヨップ(平成二十二年八月十一日)「國語教育の現場から改定常用漢字表を考へる」前川孝志) 計二 ◎活動開始以來の累計・各種刊行物六十二點 各種發表先・二十

あらたまへの高評諸家一覽(敬稱略、到著順、以下同)

◇第六十一號(平成十八年六月刊)から第七十號(平成二十二年十一月刊)迄・十冊◇

第六十一號・總編輯庭訓書小論(平成十八年六月刊) 太田稔、吉村浩之(二名) 第六十二號・總編輯庭訓論(同年十二月刊) 江口孝夫、寶邊正久、讚井丈夫(三名) 第六十三號・總編輯近世の諸學小論(平成十九年六月刊) 速水博司、日野郁夫、久保忠夫(三名) 第六十四號・總編輯書物の魅力(同年十二月刊) 江口孝夫、新谷隆信、岡田則夫(三名) 第六十五號・總編輯歐米體験記小論(平成二十年六月刊) 小川雅照、安藝由夫、小出昌洋(三名) 第六十六號・總編輯敷島の道往還(同年十二月刊) 澁谷宏海、平山寛司、島本昌彦(三名) 第六十七號・總編輯近代の隨筆小論(平成二十一年六月刊) 若井勲夫、鈴木文雄、井上雅夫(三名) 第六十八號・總編輯國巡り歌枕巡り(同年十二月刊) 大澤正道、宮田修、尾崎知光(三名) 第六十九號・總編輯自傳書簡見聞記小論(平成二十二年六月刊) 横地末次郎、佐竹義宣(二名) 第七十號・總編輯掌篇國語讀本(同年十二月刊) 新谷隆信、秋竹眞介、久保忠夫、前田哲男、山内健生(五名) 計二十七名三十篇◎創刊號以來の累計・二百十名三百六十三篇

### あらたまの諸號の質問に對する回答諸家一覽

第六十二號・庭訓に關する質問への回答・落合夏樹、重田公平、粟田信也、朝比奈正幸、田中佩刀(五名)  
第六十四號・書物の魅力に關する質問への回答・山口宗之、岡田俊之輔、中島英迪(三名)  
第六十六號・我が愛誦の和歌三首の回答(其の三)・佐藤茂、宮原サワ、川上清美、速水博司、中津海茂、寶邊正久(六名)  
第六十八號・國巡り歌枕巡りに關する質問への回答・秋竹眞介、丸山和光、太田稔、江口孝夫、久保忠夫、土田龍太郎(六名)  
第七十號・私の好きな言葉、忘れられない言葉の回答・土谷まつ江、白井善隆、金子光彦、中尾昭人、田中佩刀、濱崎衛、平岩文夫(七名) 計二十六名二十七篇◎第二十號の掲載以來の累計・百五十一名二百七十三篇

### あらたまの反響

・荒魂之會刊行物並に同人の論策への言及の記事の掲載の刊行物

萩野貞樹著舊かなと親しむ(平成十八年三月刊)、かなづかひ第三號(平成十九年九月刊)、國語國字第百九十一號(平成二十年十一月刊)、桃第百四十一・終刊號(平成二十二年三月刊) 計四  
◎創刊以來の累計・四十八點七十一回  
・同人の論策並に同胞各位に訴へる他の提言の掲載の刊行物  
平成八年四月作製の荒魂之會來歴其の三迄の累計・二十一點二十七回

### 《會報各欄一覽》

#### 會報讀書欄の書物一覽

第二百二十六號(平成十九年二月刊)・秋艸道人會津八一の學藝(植田重雄) 第二百二十八號(同年七月刊)・東京裁判の正體(菅原裕)「憲法無効論」とは何か(小山常實) 日本が世界を幸せにする(日下公人) 第二百二十九號(同年十月刊)・昭和天皇(出雲井嶋) インド亞大陸の變貌(岡本幸治) いっぱいごめん、いっぱいありがと(岡本多壽子) 第三百三十號(平成二十年二月刊)・紫式部傳・その生涯と十二「源氏物語」(角田文衛) 小學校國語讀本(石井公一郎・萩野貞樹編) 全文リットン報告書(渡部昇一解説・編) 第三百三十二號(同年七月刊) 新編百花譜百選(木下李太郎畫・前川誠郎編) 江戸の芭蕉を歩く(工藤寛正) 老いて衰えず・八十四歳年男の日記(中里富美雄) 第三百三十三號(同年十月刊)・舊漢字書いて、覺えて、樂しめて(萩野貞樹) 旧かなづかいで書く日本語(萩野貞樹) 第三百三十五號(平成二十一年四月刊)・風俗往來(森銑三) 太閤の手紙(桑田忠親) 主權回復・本當の終戰記念日は、四月二十八日である(井尻千男・入江隆則・小堀桂一郎) 第三百三十八號(平成二十二年二月刊)・いのち燃ゆ・乃木大將の生涯(中央乃木會) 言志四録のことば(田中佩刀) 美のふるさと・信州近代美術家たちの物語(植草學) 第三百三十九號(同年四月刊)・政治を改革する男・鐘紡の武藤山治(松田尚士) 古人往來(森銑三) 蕉門俳人の評傳と鑑賞(中里富美雄) 計二十四冊 累計・二百五十五冊



會報卷頭春夏秋冬欄一覽

・第二百二十二號(平成十八年二月刊)から第四百一十一號(平成二十二年十月刊)迄・計十八名二十篇 累計・七十七名百三十四篇  
豫告と實施と報告と◇あらたま刊行三十周年略記◇(駒井鐵平)連歌の會三十回の記(角山正之)「あらたま」刊行三十年に寄す(中尾昭人)大樹、曙杉に十分な空間を!(桑原草子)あらたま策策記の刊行に就て(根岸清文)正統表記による情報発信(小澤泰裕)「風信帖」と卑しき時代(吉原一美)なつかしき昭和は遠く(井上雅夫)それぞれの言葉盡し(土田龍太郎)和氣公研究餘滴◇發願以來二十餘年◇(若井勳夫)あらたま刊行物の目指すもの(加藤征司)「敬語の指針」の自敬表現(上田博和)論語・孟子講座の思ひ出(小澤泰裕)徳川時代後期和歌研究餘滴(中澤伸弘)字音假名遣研究の昨今(高崎一郎)紫女讀歌を共に歌ひしひととき(清水潤子)福田先生の本(中尾昭人)日本教師會一燈を捧げて(朝比奈正幸)愛協會の昨今◇慰靈祭の齋行そして古事記拜讀◇(岡田則夫)創美流華道に於ての文字表記(渡邊華靖)十九人二十篇

會報尚藏館逍遙欄一覽

第二百二十九號(平成十九年十月刊)・香淳皇后の御繪と畫伯たち(清水潤子)第三百十號(平成二十年二月刊)・祝美(いはひの美)大正期皇室御慶事の品々(中澤伸弘)第三百十八號(平成二十二年二月刊)・國の花、華やぐ(宮原サワ)計三篇 累計・四篇

哀悼記・平成十八年四月刊第二百二十三號以降の掲載(敬稱略)

田中正明、渡邊正廣、植田重雄、鈴木克則、白田甚五郎、村尾次郎、郡司勝義、多田顯、佐藤哲夫、新井寛、仙北谷晃一、鈴木由次、宇野精一、萩野貞樹、夜久正雄、古谷進、角田文衛、相賀徹夫、佐藤茂、内村剛介、山田輝彦、井上順理、太田絢子、緒方武亞、上田三三三、佐藤辰夫、中山典之、中村繁、秋田勝紀、中島哲平 計三十名  
◎荒魂之會來歴其の五迄の哀悼記・百四名 累計・百三十四名

紙碑・懐しき人々(敬稱略)

平成元年十月刊・會報第五十七號(宮下眞二、桶谷繁雄、木村松治郎、新田大作、藤澤一雄、竹内輝芳、村松嘉津・七名)平成五年十月刊・第七十三號(有賀清之助、野口恆樹、太田行藏、市原豊太、鐸木俊三、佐藤亮策、星運吉・七名)平成七年十月刊・第八十一號(大熊章一、白井傳、木内信胤、小見山登、福田恆存、中河與一、原田種成・七名)平成九年十月刊・第八十九號(吉澤正晶、落合欽吾、太田青丘、岩下保、樋口清之、田邊宏・六名)平成十六年十月刊・第一百七號(阿部正路、平林孝、關正臣、三瀧信吾・四名)平成二十年十月刊・第三百三十三號(石井勳、富士信夫、村尾次郎、多田顯、佐藤哲夫・五名)平成二十二年十月刊・第四百一十一號(白田甚五郎、名越二荒之助、鈴木俊雄、新井寛、鈴木由次、宇野精一、萩野貞樹、角田文衛、佐藤茂、井上順理、太田絢子・十一名)  
◎七回掲載、計四十七名

昭憲皇太后基金收益配分先一覽

一、平成七年十一月刊・あらたま第四十號(第七十四回・十二箇國、二千二百三十萬五千五百圓)二、平成十四年十月刊・會報第九號(第十三回・八十一回・十箇國、三千四百三十二萬圓)三、平成十五年十月刊・會報第十三號(第八十二回・十箇國、二千五百六十六萬圓)四、平成十六年十月刊・會報第十七號(第八十三回・十箇國、三千二百九十六萬四千圓)五、平成十七年十月刊・會報第二十一號(第八十四回・十箇國、三千六百二十六萬五千五百圓)六、平成十八年十月刊・會報第二十五號(第八十五回・十箇國、約三千九百六十六萬圓)七、平成十九年七月刊・會報第二十八號(第八十六回・十箇國、約四千四百八十萬圓)八、平成二十年七月刊・會報第三十二號(第八十七回・十箇國、約四千七百五十六萬圓)九、平成二十一年七月刊・會報第三十六號(第八十八回・四箇國、約千三百四萬圓)十、平成二十二年七月刊・會報第四十號(第八十九回・三箇國、約九百七十一萬圓)◎十回掲載

調査・全國各紙に於る歌會始御儀の記事の實態

一、平成十三年五月刊・日本の正氣恢復の爲に、荒魂之會提言竝に

調査(全國六十二日刊紙)二、同十四年四月刊・會報第七號(同六十三日刊紙)三、同十五年四月刊・會報第十一號(全國二十四紙)四、同十六年四月刊・會報第十五號(同二十四紙)五、同十七年四月刊・會報第十九號(同二十四紙)六、同十八年七月刊・會報第二十四號(同二十四紙)七、同十九年七月刊・會報第三十二號(同二十四紙)八、同二十年七月刊・會報第三十九號(同二十四紙)九、同二十一年四月刊・會報第三十五號(同二十四紙)十、同二十二年四月刊・會報第三十九號(同二十四紙)◎今回掲載

調査・全國(首都圏)各紙に於る元旦の皇室記事の實態

一、平成十三年五月刊・日本の正氣恢復の爲に、荒魂之會提言並に調査(全國六十二日刊紙)一、同十五年四月刊・會報第十一號(同六十二紙)三、同二十年四月刊・會報第三十一號(首都圏六紙)四、同二十一年二月刊・會報第三十四號(同六紙)五、同二十二年二月刊・會報第三十八號(同六紙)◎今回掲載

荒魂之會の來歴(荒魂之會の全會合の摘要)

一、平成八年四月刊・會報第八十三號(荒魂之會二十一年の來歴)二、同十三年四月刊・會報第三號(荒魂之會二十二年から二十六年迄の來歴)三、同十八年二月刊・會報第二十二號(荒魂之會二十七年から三十一年迄の來歴)四、同十八年四月刊・會報第二百二十三號(同)五、同十八年七月刊・會報第二百二十四號(同)◎今回掲載

連歌の會の詠草(十五回分、十回分、五回分、三度掲載)

一、平成三年四月刊・會報第六十三號(あらたま連歌の會十五回詠草・句數(第一回・十三、第二回・十八、第三回・八、第四回・八、第五回・十八、第六回・十六、第七回・十八、第八回・十八、第九回・十八、第十回・八、第十一回・十八、第十二回・十八、第十三回・十八、第十四回・十八、第十五回・十八))二、平成十三年四月刊・會報第三號(あらたま連歌の會第十六回以後詠草・句數(第十六回・十八、第十七回・十八、第十八回・十八、第十九回・十八、

第二十回・十四、第二十一回・十六、第二十二回・十八、第二十三回・十二、第二十四回・十八、第二十五回・十六))三、平成十八年四月刊・會報第二十三號(あらたま連歌の會第二十六回以後詠草・句數(第二十六回・十八、第二十七回・十六、第二十八回・十六、第二十九回・十、第三十回・十八))◎今回掲載

例會の國歌並に唱歌齊唱の一覽

國歌・天長節、地久節、行幸啓並に皇室の慶事の際に歌ふ。十六回(例會・十五回、別途會合・一回)◎累計・五十一回  
唱歌・二十六曲五十六回 回数一覽・八回(鐵道唱歌第四集)七回(鐵道唱歌第五集)五回(一月一日(二十一)紀元節(二十二)明治節(二十四)天長節(二十一)二回(一寸法師)一回(春の小川(四)待ちぼうけ、臘月夜(二)我は海の子(七)案山子、埴生の宿(三)さくら(三)荒城の月(七)鎌倉(五)夏は來ぬ(五)濱邊の歌(五)水師營の會見(四)箱根八里(七)早春賦(三)櫻井の訣別(五)浦島太郎、海(三)元寇(二)赤とんぼ(二)◎累計五十二曲二百六十五回( )内は各曲の累計

人物曆の朗讀(平成十四年七月より同二十二年十二月迄)

平成十四年 七月・明治天皇 九月・和宮内親王 十月・吉田松陰 十一月・坂本龍馬 十二月・孝明天皇(五人)  
同十五年 一月・板倉内膳正 二月・村田春海 三月・井伊掃部頭 四月・靜御前 五月・大久保利通 六月・林子平 七月・荷田春滿 九月・歌川廣重 十月・二宮尊徳 十一月・中濱萬次郎 十二月・淺井忠(十一人)  
同十六年 一月・元田永孚 二月・間宮林藏 三月・廣瀨中佐 四月・近藤勇 五月・新井白石 六月・加藤清正 七月・大政所 八月・三遊亭圓朝 九月・乃木大將 十月・松尾芭蕉 十一月・樋口一葉 十二月・朱樂菅江(十二人)

同十七年 一月・良寛上人 二月・西行法師、伴林光平 三月・上杉謙信 四月・佐久間艇長 五月・淀君、豊臣秀頼 六月・徳川吉宗 七月・久坂玄瑞 八月・十返舎一九 九月・曾呂利新左衛



門 十月・伊藤博文 十一月・親鸞聖人 十二月・朱樂菅江(四人)

同十八年 一月・法然上人、契沖阿闍梨 二月・堺事件の十一士

三月・鳥居忠吉 四月・池野大雅 五月・眞田幸村 六月・織田信長 七月・大政所 八月・十返舎一九 九月・小泉八雲 十月・酒井忠次 十一月・小林一茶 十二月・竹内式部(十三人)

同十九年 一月・平手政秀 二月・大石内藏助 三月・歌川國芳

四月・昭憲皇太后 五月・安藤直次 六月・高山彦九郎 七月・西郷從道 八月・白虎隊士 九月・曾呂利新左衛門 十月・戸田蓬軒、藤田東湖 十一月・徳川慶喜 十二月・梅臈夫人(十三人)

同二十年 一月・鳴瀬正成 二月・清水誠 三月・本多正純 四月・高杉晋作 五月・武市半平太 六月・清水宗治 七月・酒井忠勝 八月・中江藤樹、吉野 九月・山東京傳 十月・新保西水 十一月・野村望東尼 十二月・平山行藏(十三)

同二十一年 一月・赤井陶然、菅井梅閑 二月・伊藤坦庵 三月・水野勝成 四月・高田屋嘉兵衛 五月・清水赤城 六月・毛利元就 七月・蒲生君平 八月・菅茶山 九月・青山延子 十月・本多忠勝 十一月・中岡慎太郎 十二月・箕作省吾(十三)

同二十二年 一月・徳川頼宣 二月・永田徳本 三月・深井志道軒 四月・近藤勇 五月・奴の小萬 六月・鈴木胤 七月・大隈言道 九月・加藤嘉明 十月・前野蘭花 十一月・向井元升 十二月・朱樂菅江(十一)

註・イ、二名の記載のある月は出典に随ふ。ロ、堺事件の十一士竝に白虎隊士は何れも代表語として一人として數へる。ハ、八月は休會の月につき例會資料の作製はない。但し、適宜九月若しくは十月の資料に追記の例は示した。ニ、記載上では百五人であるが、重複の五人(太字の分)を除いた實人數は百人である。

### 例會に於る各種音聲並に映像の鑑賞一覽

歌會始御儀・平成十二年二月六日(日)、同十三年四月一日(日)

同十四年二月三日(日)、同十五年二月二日(日)、同十六年二月一日(日)、同十六年十一月三日(水・祝) 少年讀本刊行二十五

周年記念懇親會(芝彌生會館)、同十七年二月六日(日)、同十八年二月五日(日)、同十九年二月四日(日)、同二十年二月三日(日)、同二十一年二月二十一日(日)、同二十二年二月十四日(日) 計十二回

正倉院展・平成十五年十一月二十九日(日)、同十六年十一月二十七日(日)、同十七年十一月二十六日(日)、同十八年十一月十九日(日)、同十九年十一月十八日(日)、同二十年十一月十六日(日)、同二十一年十一月十五日(日)、同二十二年十一月十四日(日) 計八回(太字の二回は其の他の鑑賞の際と重複)

其の他・平成七年十一月五日(日) 故福田恆存先生一周忌追悼の會(音聲) 新潮カセットブック・ハムレット、同八年十一月十七日(日)(音聲) 平曲、福田恆存講演第一輯(映像) 世界の中の君が代、パール博士、同九年九月二十七日(日)(音聲) 戦艦大和の號砲(映像) 昭和天皇、同十年十二月十三日(日)(映像) 天皇皇后陛下、國民と共に、皇后陛下「子供時代の讀書の思い出」、同十三年十二月十六日(日)(映像) 古寺巡禮四天王寺、同十四年十一月三十日(土)(音聲) 小林秀雄全集附録、同十五年九月七日(日)(映像) 十五

平治物語繪詞、同十五年十二月十四日(日)(映像) 皇室と日本人、現代に生きる日本の心、同十六年十一月二十七日(日)(映像) 正倉院展(音聲) 決定版三島由紀夫全集第四十一卷、同十七年三月六日(日)(映像) 川端康成展(平成十四年十一月) 皇室の四季(平成十二年一月)、同十七年十一月六日(日) 故石井勲先生一周忌追悼會(音聲) ラヂオ深夜便、同十八年十一月三日(金・祝) あらたま刊行三十周年記念懇親會(芝彌生會館)(音聲) 福田恆存講演・シェイクスピア劇の魅力、中村吉右衛門朗讀・古事記冒頭の條、同二十一年九月六日(日)(映像) 阿修羅像を運ぶ、同二十一年十一月十五日(日)(映像) 正倉院展、皇學祭(井上順理講演)、同二十二年九月十二日(日)(映像) 廣重の東海道五十三次 計十五回(太字の正倉院展の二回は重複の分) ◎重複の二を除き、合計二十四種三十三回

### 散策の行程に於る各種神事藝能鑑賞一覽



一、昭和五十二年一月八日(土) 講談(本牧亭)(八名) 二、同五十四年一月二十日(土) 落語(鈴木)(十名) 三、平成二年十一月三日(土・祝) 流鏑馬(明治神宮)(五名) 四、同四年十月四日(日) 能(國立能樂堂)(五名) 五、同十一年十月十日(日・祝) 草鹿式(靖國神社)(三名) 六、同十二年一月八日(土) 歌舞伎(新橋演舞場)(九名) 七、同十三年一月十三日(土) 能(國立能樂堂)(六名) 八、同十三年八月十七日(金) 流鏑馬(三嶋大社)(九名) 九、同十四年一月十二日(土) 落語(國立演藝場) 八名、十、同十四年二月二十三日(土) 文樂(國立劇場)(十名) 十一、同十四年四月二十九日(月・祝) 舞樂(明治神宮)(三名) 十二、同十五年一月十二日(日) パイプオルガン演奏(奏樂堂)(十二名) 十三、同十七年七月三十一日(日) 神樂(鷲宮神社)(四名) 十四、同十七年十二月三日(土) 里歌舞伎(秩父神社)(五名) 十五、同二十年十二月二十三日(火・祝) 落語(淺草演藝場)(三名)

◎落語(三) 能(二) 歌舞伎(二) 流鏑馬(二) 草鹿式(一) 講談(一) 文樂(一) 舞樂(一) パイプオルガン(一) 神樂(一) 計十種十五回

### 「荒魂之會の各種提言並に調査一覽」

- 一、同胞各位に訴へる、「日中漢字の略字共通化」なる國語破壞の策謀の阻止に就て 昭和五十二年十月八日(日)
- 二、同胞各位に訴へる(その二) 國語表記の正則に就ての提言 昭和五十三年十月二十一日(木)
- 三、同胞各位に訴へる(その三) 漢字制限撤廢に就ての提言 昭和五十四年十月一日(月)
- 四、同胞各位に訴へる(その四) 郵便物等の宛名表記を正す事に就ての提言 昭和五十五年九月二十日(土)
- 五、要望書・學校教育に於る望ましい漢字指導に就て 文部省並に教育用漢字調査研究協力者會議殿 昭和五十六年七月十日
- 六、要望書・新紙幣發行による肖像畫の改變に就て 大藏大臣渡邊美知雄殿 昭和五十六年七月二十六日

註・六、七の原文は毛筆卷紙の書狀

- 七、同胞各位に訴へる(その五) 文の姿を保つ事に就ての提言 漢字・學習帳・名前・算用數字(附記一・縦書用のノオトその他の例 附記二・教育用漢字調査研究協力者會議の報告を駁す) 昭和五十六年九月二十七日(日)
- 八、同胞各位に訴へる(その六) 國語審議會の假名遣審議に關する提言(附・文部省への漢字指導に關する要望書再録) 昭和五十七年十月三日(日)

- 九、同胞各位に訴へる(その七) 文化防衛の根幹に關する提言 國語表記の正則と年表示とに就て(附・大藏省への要望書再録) 昭和五十八年十月二日(日)
- 十、同胞各位に訴へる(その八) 國語表記の多様性と統一性とに關する提言(附・文部省への漢字指導に關する要望書再録) 昭和五十九年十月(神無月)十四日(日)
- 十一、同胞各位に訴へる(その九) 國語破壞の是正に關する提言・新聞社「用字用語集」並に「公文書作成の要領」の改廢に就て 昭和六十年十月十日(木)十六
- 十二、同胞各位に訴へる(その十) 國語國字問題の新たなる危機に關する提言、「現代假名遣い」並に國語表記の機械處理に就いて 昭和六十一年十月十日(金)
- 十三、同胞各位に訴へる(その十一) 國語審議會の責務に關する提言・社會一般の面目を保つ爲に 昭和六十二年十月十八日(日)
- 十四、同胞各位に訴へる(その十二) 外來語の濫用とその要因とに就て 昭和六十三年十月二日(日)
- 十五、調査・定期刊行物に於る年表示の實態(週刊誌、月刊誌、文庫、新書、選書 計九十三種) 平成元年四月
- 十六、調査・新聞に於る年表示と表記との實態 一、平成二年元旦號に於る日刊紙の年表示(八十四紙) 二、平成二年元旦號に於る日刊紙六紙の表記の實態(註・六紙とは、讀賣新聞、朝日新聞、毎日新聞、産經新聞、日本經濟新聞、東京新聞、である。) 平成二年四月



十七、日本の正氣恢復の爲に、獨立恢復四十五周年に關する荒魂之會提言(國語、教育、風儀、外交の二十五項目)

關係諸機關諸團體各位 平成九年四月六日(日)

十八、荒魂之會調査其の一・年表示(甲) 日刊紙一、平成十年元旦號に於る日刊紙の欄外の年表示(八十六紙)二、日刊紙二十紙に於る平成十年元旦號の年表示の實態

平成十年二月

十九、荒魂之會調査其の二・年表示(乙) 週刊誌月刊誌、平成十年元旦號に於る週刊誌月刊誌四十七紙の年表示の實態

平成十年四月

二十、荒魂之會調査其の三・年表示(丙) 文庫新書選書等、郵便の消印、曆、各種文庫新書選書等に於る奥附の年表示(計二十八) 郵便物の消印の年表示(百二十二局百四十二消印) 平成十年各企業の宣傳用曆の年表示他の實態(計十八)

平成十年七月

二十一、荒魂之會調査其の四・年表示(丁) 教科書並に年鑑、平成十年使用小中高校國語、歴史教科書並に各種年鑑の年表示の實態(教科書二十六冊、年鑑五冊) 平成十年十月

荒魂之會調査其の五・表記用語(甲) 諸官廳の用語、平成十年度に使はれてゐる漢字假名交りの語の姿に背いてゐる各種の用語、標語、愛稱の實態(中央諸官廳九、地方自治體十三) 平成十一年二月

二十三、荒魂之會調査其の六・表記用語(乙) 皇室用語、平成十年度中の首都圈日刊紙六紙に於る皇室記事並に用語の實態(甲・皇室記事の掲載の有無 乙・皇室記事に於る用語及び敬語の實態) 平成十一年四月

緊急提言・國歌君が代の歌詞の護持を求む 平成二十一年七月一日(水)

二十五、荒魂之會調査其の七・表記用語(丙) 動植物名の表記、平成十年度に於る教科書並に日刊紙 平成十一年七月

二十六、荒魂之會調査其の八・表記用語(丁) 語の破壊、平成十年度に於る教科書並に定期刊行物の表記の實態

二十七、緊急提言・新紙幣二千圓札の發行に斷乎反對す 平成十一年十一月一日(月)

二十八、緊急提言・英語第二公用語化の企圖に斷乎反對す (註・新二千圓札は平成十二年七月に登場。) 平成十二年三月一日(水)

二十九、調査九・日刊紙十二紙に於る一面の圍み記事の人物丙に年表示の記述の實態(平成十二年一月一日から十二月三十一日迄の記事) 平成十三年五月

三十、調査十・平成十二年間回顧の記事の實態 (國內・香淳皇后崩御の記事 海外・三月十二日のロオマ法王の過去を清算するミサの記事) 平成十三年五月

三十一、調査十一・平成十三年元旦號朝刊一面の記事の見出しの年表示の實態(六十二紙) 平成十三年五月

三十二、調査十二・全國六十二日刊紙に於る平成十三年元旦の皇室記事並に歌會始の御儀の記事の掲載の實態 平成十三年五月十七

三十三、調査十三・平成十三年元旦號に於る首都圈の日刊紙六紙の表記の實態 平成十三年五月

三十四、子供は何が教へられてゐないか◇國語國史の常識の恢復の爲に、主權恢復五十周年に關する荒魂之會提言(國語、國史、風儀の五十項目) 皇紀二千六百六十二年・平成十四年四月七日(日)

三十五、教養の衰頽を坐視する事勿れ◇同胞各位に訴へる・續の一◇(第八十一回昭憲皇太后基金收益配分先一覽(平成十四年四月十一日)を併載) 平成十四年十月六日(日)

三十六、同胞感の涵養の源泉を涸渇させる事勿れ、我々は何處にゐるか◇同胞各位に訴へる・續の二◇(全國六十二日刊紙に於る年表示並に皇室記事の實態他の記事を併載) 平成十五年四月十三日(日)

三十七、國語國史國文學ではないのか、國語の作法を破壊する事勿れ◇同胞各位に訴へる・續の三◇(全國大學文學部系統

の學科名に於る國語國文學國史の稱他の記事を併載)

三十八、何處の誰かが分からなくなる、これも國語の問題である◇  
同胞各位に訴へる・續の四◇(平成十七年四月十五日附  
首都圏六紙朝刊の大阪市職員厚遇問題の記事に於る漢數  
字算用數字の使用の實態他の記事を併載)

三十九、要望書・政府開發援助等の國民負擔の實態の報道を望む  
全國日刊新聞編輯局長各位 平成十七年七月三日(日)

四十、何を言つてゐるのかが分からなくなる、物の名を失はせる  
假名表記◇同胞各位に訴へる・續の五◇(全國三十業種  
千六百九十六社の企業名の表記の實態の記事を併載)

四十一、教へられるべき事が教へられてゐない、明治天皇聖蹟の史  
蹟指定解除の撤回を望む◇同胞各位に訴へる・續の六◇  
(明治天皇行幸地數一覽他の記事を併載)

四十二、知らされるべき事が知らされてゐない、再び同胞感の涵養  
に關する提言◇同胞各位に訴へる・續の七◇(首都圏六  
紙に於る平成二十年元旦の皇室記事他の記事を併載)

四十三、御の字は御の字の儘に、常用漢字表は撤廢の秋に至つてゐ  
る◇同胞各位に訴へる・續の八◇(首都圏六紙に於る御  
大婚記事の見出しの實態(四月十日附朝刊)を併載)

四十四、國語といふ大河を涸渇させる事勿れ、常用漢字表の廢止を  
望む◇同胞各位に訴へる・續の九◇  
平成二十二年七月四日(日)

附  
四十五、日刊紙六十二紙への緊急提言三篇の送狀  
平成十二年十二月十日(日)

四十六、小泉内閣閣僚、都道府縣知事、新聞社編輯局長への同胞各  
位に訴へる・續の一の送狀  
平成十四年十月六日(日)

〔備考〕

イ、種別・同胞各位に訴へる(十二) 續同胞各位に訴へる(九) 緊  
急提言(三) 主權恢復に關する提言(二) 要望書(三) 各種調査  
(十五) 計四十四 附・二 合計四十六

ロ、發表の形態・單獨(同胞各位に訴へる十二篇、緊急提言三篇、  
主權恢復に關する提言二篇、要望書三篇、十五の調査、十六の調  
査) 計二十二 會報に掲載分の別刷(續同胞各位に訴へる九篇)

計九 會報に掲載分(調査其の一から其の八迄) 計八「日本の正  
氣恢復の爲に、荒魂之會提言並に調査」に初出の記事(調査其の  
九から十三迄) 計五

八、再録・平成三年十月刊「合本同胞各位に訴へる」(同胞各位に  
訴へる十二篇、五、六の要望書二篇(同胞各位に訴へる其の八、  
其の九に併載後) 十五、十六の調査二篇・計十六) 平成十二年十  
二月刊「あらたま第五十號」(二十八の緊急提言・計一) 平成十  
三年五月刊「日本の正氣恢復の爲に、荒魂之會提言並に調査」(日  
本の正氣恢復の爲に、獨立恢復四十五周年に關する荒魂之會提  
言、荒魂之會調査其の一から八迄、緊急提言三篇、日刊紙六十二千八  
紙への緊急提言の送狀・計十三) 平成十七年十二月刊「あらたま  
第六十號」(三十九の要望書・計一)

〔あらたま編輯後記一覽(第六十一號から第七十號迄の十號分)〕

◇第六十一號 總編輯・庭訓論小論 平成十八年六月◇

庭訓書小論の特輯號を編む。庭訓とは親が子に與へる教訓である。

庭訓が成り立つのは、祖先を敬ひ、家の存續と子孫の繁榮とが期待  
せられる場合である。本年三月五日附毎日新聞朝刊の一面に、「改  
憲賛成最高の65% 戦後の役割8割が評價 反対は27%」といふ輿  
論調査の結果が載つてゐる。一億三千万人の國民の中から千人を目  
標に電話を掛け、千百十五人の回答者を得た結果であるといふ。こ  
の調査には日本國憲法廢止の項目は無い。九百人が有難るこの憲法  
の下で、我が同胞の拉致は未解決の儘である。



位に訴へる・續の一の送状 平成十四年十月六日(日)

◇第六十二號 總特輯・庭訓論 平成十八年十二月◇  
明治二十三年十月三十日、明治天皇には教育に關スル敕語を下したまふ。爾來五十八年を閲して、昭和二十三年六月、聯合國軍占領下の我が國に於て、衆議院は教育敕語の排除を、參議院は失效を夫々に決議す。其の後、昭和二十七年四月の主權恢復の時を経て本年平成十八年に至る五十八年間、大御心は等閑に付せられた儘である。本年七月二十日、日本經濟新聞は、元宮内廳長官たる某氏の手帳の斷片を公表す。これには靖國神社に關して、昭和天皇の大御心が窺はれるといふのである。奇怪な話である。

◇第六十三號 總特輯・近世の諸學小論 平成十九年六月◇  
プラトンの國家に於て、自由の行過ぎを論じたソクラテスの曰く「父は子に似たものとなり、息子たちを怖れることを習慣とし、他方、子は父に似たものとなり、また自分が自由であることのためなら、兩親に恥ぢる氣持も怖れも抱かぬことを習慣とする。」と。二千百餘年を隔てて、本居宣長は秘本玉くしげに於て曰く「自由はよきもの也。然れども、惣して自由のよきは、よきほと損あり。何事も自由よければ、それだけ物入り多く、不自由なれば物入はすくなくし。」と。近世の諸學を讀みて古今東西の符合を知る。

◇第六十四號 總特輯・書物の魅力 平成十九年十二月◇  
書物の魅力の特輯號を編む。昭和五十年十一月の例會より本年平成十九年十二月の例會に至る足掛け三十三年間の課題の書物は二百七十三點である。この間に、平成九年から本年迄の足掛け十一年間に古今和歌集に始まる二十一代集と新葉和歌集とを各自が讀む。其の成果は敷島の道逍遙として、平成九年六月刊の第四十三號の古今和歌集選歌十八首の掲載から本號平成十九年十二月刊の第六十四號の新葉和歌集選歌十八首に至る。今日の書物の魅力には、敷島の道の本道、脇道、枝道が含まれてゐるのや否や。

◇第六十五號 總特輯・歐米體験記小論 平成二十年六月◇  
平成十七年六月刊のあらたま第五十九號は外國人の日本論小論の特

輯號であつた。三年後の本年平成二十年六月刊の第六十五號は歐米體験記小論の特輯號である。明治十一年刊の特命全權大使米歐回覽實記から、平成五年刊の東宮御著テムズとともに至る七冊の體験記は明治四年から昭和六十年迄の百十四年間の日本人の歐米體験を夫々の立場からの見事な觀察眼で示した佳品である。歐米體験記は歐米の殖民地での體験記を得て完遂する。今日、宗主國を持たざる國を遣してくれた先人への敬意は奈邊にありや。

◇第六十六號 總特輯・敷島の道往還 平成二十年十二月◇  
平成九年から十一年をかけた敕撰並に準敕撰の二十二の歌集の通覽は、昨年十二月刊のあらたま第六十四號への最後の十八首の掲載を以て一應の成果を示した。が、紹介したい歌には限りがない。本號から、十二月の號に敕撰和歌集拾遺を三度、自餘の候補歌の中から想を新たに紹介してゆく。これを機に、本號は敷島の道往還の特輯號を編む。又、讀者の便を考慮して、これ迄の二十二の選歌一覽を別刷の附録と<sup>して</sup>添へる。夫々の一日、千年の時の隔てを往還する樂しみを<sup>得る</sup>縁となる事を願つて已まない。

◇第六十七號 總特輯・近代の隨筆小論 平成二十一年六月◇  
近代の隨筆の名品を讀み繼ぐ。鍋木清方の文章には「古人の尊ぶべき」といふ文言が見え、鷗外の思ひ出を語る小金井喜美子の文章には、引用せる賀古鶴所の書簡に「先人の小傳」といふ文言が見える。何れも本來の使はれ方である。芥川龍之介の「死んだ父」と云ふ意味の『先人』はいつか『古人』と云ふ意味に變つてゐる。」との侏儒の言葉での言分を思ひ出す。折しも中公文庫の一冊として、小出昌洋編森銑三著古人往來が出た。よつて、本誌の編輯方針三條中の「先人」は本號より「古人」に改める。

◇第六十八號 總特輯・國巡り歌枕巡り 平成二十一年十二月◇  
平成六年六月、中央公論社刊の森銑三著作集續編第十一卷に落葉籠全九百八十六篇が收められてゐる。世評の篇で著者の曰く「民主主義か何か知らないが、投票の多寡で高下を定めようといふ考へ方は、



どういふものであらうか。大勢のもてはやす書物は、大勢が讀むがよい。自分は自分の選んだ書物を讀むことにしたい。」と。元は日本古書通信に昭和三十年八月號より同四十一年八月號迄百三十三回に亙つて連載せられた。今年平成二十一年五月六日、中公文庫上下二冊で三度世に出た。正しく待望の書である。

◇第六十九號 總特輯・自傳書簡見聞記小論 評城二十二年六月◇「柘榴口といふのは、妙な言葉だが、昔から、鏡磨ぎ師は柘榴の實を使用つたもの、古い繪草紙などに鏡磨ぎの側には柘榴の實がよく描いてある……でその名の意は、屈み入る（鏡入る）の洒落から來たもの、……むかしはすべてこう雅なことをいつたものです。」とは高村光雲が語る「幕末維新懷古談」の一齣である。此處には、エゴな生活といふが如きの馬鹿げた語が亂發せられる今日にはない暮しがある。「無理からぬ」では文法の活用が出來まい。光雲は正しく「無理ならぬ」と何度も口にしてゐる。

◇第七十號 總特輯・掌篇國語讀本 平成二十二年十二月刊◇あらたまの刊行三十五年目を締括る第七十號の本號は、掌篇國語讀本である。特輯記事の國語の發生は、先年清水馨八郎氏の指摘による國語に於る多岐な手の用法に示唆を得て以來、細やかな工夫を重ねて實現の機を得たものである。數へて七十と言へば、古來人の歳では七十の賀、古稀である。昭和五十六年五月五日目黒雅叙園に於て、荒魂之會は初めて先師福田恆存に見えた。出席者は二十四名、先師には古稀の祝の席でもあつた。爾來二十九年、小誌の編輯者も亦、古稀に達す。但し、馬齢を加へるのみ。附記・國語の發生の記事は今般立案の編輯内容に本づいて、大槻文彦著大言海を初め、主として各種國語辭典に語例を求めて成つたものである。各種辭典關係者の勞苦に深謝申上げる。本號を機に辭典の中に新たな語例を發見する時が得られる事を望んでやまない。

### 「備考・私家版の各種印刷物」

會報（同人配布）第一號から第四號迄（四）シェイクスピア言葉盡

し（同人並に記事提出者）ふみぐら刊行の纏め並に荒魂之會別途刊行物の沿革に就て、あらたま散策記其の一・其の二・其の三（三）合本愛誦詩歌文章撰大八洲刊行記、正論誌讀者欄に於る國語國字論争の記録（佐藤雅喜氏の原稿による冊子）あらたま全五十號掲載記事題目一覽、あらたま刊行二十五周年記念行事の纏め、荒魂之會編少年讀本全五輯・明治大正昭和三代詩歌案内・ふみぐら・大八洲の刊行の來歴、少年讀本刊行二十五年周年記事行事の纏め、荒魂之會來歴其の一から其の六迄（六）荒魂之會活動の各種參加狀況（三）福田恆存回顧、あらたま刊行三十年乃回顧、紙碑・懐しき人々、あらたま刊行三十周年記念物故諸先生慰靈祭並に偲ぶ會の次第、あらたま刊行三十周年記念懇親會の次第、福田恆存先生と荒魂之會、あらたま編輯後記一覽（第三號から第六十號迄）荒魂之會全刊行物一覽、山下覺辯文集、かりがね集・其の三、あらたま刊行三十周年記念行事通覽第一分冊・あらたま刊行三十周年記念懇親會の纏め、同第二分冊・荒魂之會同人三十餘の各種活動一覽、同第三分冊・福田恆存先生と荒魂之會 計三十七（平成二十三年六月刊荒魂之會來歴・其の六迄）その他、活動計畫、各種會合の開催次第等の諸文書多一十數。（あらたま刊行三十周年記念懇親會の次第には「荒魂之會全刊行物一覽」他の記事の併載につき、三十七點の中に加へてある。）

### ◇編修後記◇

あらたま刊行三十五周年を機に荒魂之會來歴・其の六を編む。これ迄の活動の通覽の便を工夫した新しい記事を御覽願ひたい。平成二十三年六月現在、荒魂之會の同人は六名（小澤泰裕、角山正之、根岸清文、前川孝志、駒井鐵平、清水潤子）賛助會員百四十三名。

荒魂之會來歴・其の六（會員配布・二百二十部）◇あらたま刊行三十五周年を機に作製◇平成二十三年六月五日（日）刊編修・發行荒魂之會（千葉市中央区葛城一丁目三番九號・駒井方）（製作）記事・編修 駒井鐵平 製版・印刷 角山正之